慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	安岡章太郎『流離譚』校異 (二)
Sub Title	
Author	成田, 朱凜(Narita, Akari)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2023
Jtitle	三田國文 No.68 (2023. 12) ,p.131- 160
JaLC DOI	10.14991/002.20231200-0131
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20231200-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安岡章太郎『流離譚』校異（二）

成田朱凛

凡例は『三田國文』第六十七号（二〇二二年一二月）に示したため省略する。

頁	行	(1)『安岡章太郎集』第八巻	(2) 単行本『流離譚』上巻	(3) 初出『新潮』
236	5	※16	※16	※16
246	2	一つは、長州藩自身の事情によるもの、すなわち馬関戦争の敗北である。この年、五月十日、幕府に強制した攘夷期限が切れると、その翌日、長州藩は下関海峡を通過する米船ベンブロー号を砲撃したのを皮切りに、仏船キンシャン号、蘭船メジューサ号などに次々と発砲した。その結果、六月一日から米、仏、東洋艦隊の報復襲撃をうけ、軍艦二隻を撃沈されたほか、上陸してきたフランス海軍陸戦隊に一時砲台を占拠され、大砲を持ち去られるなど、さんざんな目にあった。しかも幕府は、覚之助の手紙にもあったように、それみたことかと言わんばかりに長州の過激な攘夷をいましめ、陰ではむしろ外国軍を援助さえした。こうして、ほとんど孤立させられた長州は、今後自藩の存立をまもるためにも何とかして日本全体を尊攘から討幕へ引っぱって行かなければならなくなった。	〔同上〕	一つは、長州藩自身の事情によるもので、この年五月、長州は下関海峡を通る外国船に発砲したことから、米、仏、東洋艦隊の報復襲撃をうけ、軍艦二隻を撃沈されたほか、フランス海軍陸戦隊に砲台を一時占拠されるなど、散々の敗北を喫した。しかも幕府は、これを長州の暴発によるものだとして、もつぱら過激な攘夷をいましめたので、長州はほとんど孤立させられさうになつた。そこで長州は、自藩の今後の存立を守るためにも何とかして日本全体を尊王攘夷に引つぱつて行かうといふことになつた。
246	11	次に、これと前後して起った姉小路卿暗殺で、京都で薩摩藩の勢力が急速に凋落したことも、大和行幸を推進させた理由の一つである。計画の立案者真木	〔同上〕	ところで、もう一つの理由といふのは、これと前後して起つた姉小路卿暗殺事件のために、京都での薩摩藩の勢力が急激に凋落したことだ。前にも述べた

266 1	和泉は、かねてからの討幕論者ではあったが、それには薩長の雄藩連合が不可欠であるとして、姉小路事件のあと薩摩藩を乾門の警備から下ろし、薩藩士の九門の出入禁止を決めたときにも、一人これに最後まで反対していた。しかしその後、薩摩藩への疑惑が濃くなり、薩摩の藩論が公武合体に傾いていることが明らかになるにつれて、真木も薩長連合をあきらめざるを得なくなった。		※17
260 1	さらに三つめの理由として、小笠原図書頭と松平春嶽の率兵上京があげられる。両者とも計画は未遂におわったが、いま一歩、足を踏み出す勇気さえあれば、京都の尊攘派のみならず朝廷の勢力さえ転覆させるクーデターが成立するところであった。久坂玄瑞は、京都が手薄だから至急上京するように、という長州藩主に対する朝命を奉じて、山口に急行し、小笠原たちのクーデターに対抗する反クーデターとして大和挙兵の根廻しを行ったうえ、大和行幸の具体案を持って、再び京都にもどってくるのである。	〔同上〕	※17
252 11	すでに、ことしの一月、京都藩邸で武市は容堂に造作もなしに懐柔されている。それがいま、また同じようにコロリとまるめこまれているのは、まったく以てどうしたことであろう……。	〔同上〕	
250 15	島村寿太郎、もしくは寿之郎の公算大であるともいう。	ことによれば、那須、大石、嘉助のうちのいづれかの偽名でもあらうか。	
	長州藩には天誅組に資金を出した記録は一切ないというが、久坂玄瑞をつうじて機密費のようなものが渡っていた形跡はあるし、また淡路の資産家古東領左衛門も家産を天誅組のために傾けたといわれているが、挙兵の資金のルートは、それだけではなさそうだ。	〔同上〕	
		〔ナシ〕	
247 2		〔ナシ〕	

269 16	いずれにしても、十三日の夜から十四日にかけて、吉村は目のまわる忙しさであり、とても丹虎の娘に別れをつげるいとまもなかったことであろう。中山忠能の日記には、十三日にも吉村が忠光のところへやってきたとあるが、これはおそらく行幸の勅命の出るまえの昼間のことであり、まさか夜になって鎧を田中村の中山邸にかつぎ込んだわけではないだろう。	〔同上〕	
276 14	このように、那須からは義父に贈る形見の小袖をあずかったり、吉村からは鎧の代金をことづかったりしているところを見ると、覚之助は以前から彼等と附き合いがあり、薩摩藩邸にかくまわれている嘉助とも、時折は出会っていたのかとも思われる。	〔同上〕	
277 9	※18 倒幕の意志があった。	※18 〔同上〕	
285 7			
286 17	とにかくそういう人も、浪士や庄屋や百姓と一緒に仲間に加わっているところに、この「義挙」の平等主義的な性格の一面があらわれているのではないか。	〔同上〕	
288 1	到底再現できているわけはないのであるが。	〔同上〕	
291 4	年貢半減といえば、相楽総三の赤報隊も戊辰役のと	〔同上。但し　だからである。→だから	

とすれば「過夜」といふのは八月十三日の夜であつて、吉村は久坂から金を借りると、覚之助に会つて一と先づ二十両をあづけ、その後、大高屋へ寄つて五両を手つけ金に緋縅の鎧兜を忠光のために注文したのであらう……。どつちにしても、その鎧は当夜、田中村の中山邸に持ちこんだはずはない。

この那須の出陣にあたつての手紙は、前にも一度、形見に小袖一枚を安岡覚之助にあづけるから受け取つてもらひたいと述べた部分についてだけ、簡単に触れたが、それは京都藩邸詰めになつた覚之助が薩摩藩邸にかくまはれてゐる嘉助と、何か連絡がとれてゐたかどうかが気になつたからであつた。

※18
倒幕の意志があつた。江戸から上京する途中、久能山にのぼつて東照公の廟前で、「爾老猾、吾他日志を得れば、則ち必ず爾の墓を発き、爾の骨を鞭うたん」と罵つて、まはりの人を驚かせたといふ。身分上は藩政期の社会で最下層に置かれた人の頭といふことになるわけだらう。この人は「善之祐僕」といふことになつてゐるが、これは善之祐の下僕として従事したといふことではなく、名目上そのやうなかたちで志願して義挙の一員に加つたものかと思はれる。

到底再現できてゐるわけはないのであるが……。しかし、いづれにしろ二旒の菊の紋をひるがへした一隊の先頭を行くその人が、非人頭であるとか、誰かの下僕であるとかいつた印象は何処にもない。事実、その人は後日、五条の本陣できめられた義挙浪士の役割によれば、「鑓一番伍長」となつてをり、水郡英太郎などと同列である。

ところで同じ八月十七日の夜から十八日にかけて、

3039			き農民たちに年貢の半減を約束してまわった。そのため財政困難な新政府は恐慌をきたし、結局、赤報隊を偽官軍ということにして、相楽以下を斬刑の上、梟首にしたという。もしその通りだとすれば、仮に大和義挙がうまく行っていたとしても、天誅組は藤本鉄石、松本奎堂、吉村虎太郎以下、全員が相楽と同じ目にあうことになっていたのではないか？　これは必ずしも仮定の問題ではない。いきなり農民の年貢を半額にすれば、大抵の政府は立ち行かなくなるはずだからである。しかし、現実はさらに厳しく、鉄石が村役人や庄屋を集めて義挙の主旨を話している頃、京都では政変が起って、大和行幸御親征は中止となり、三条実美以下十八人の尊攘派の公卿たちも朝廷から閉め出されていた。大和行幸は、何度も繰り返すように、実際は倒幕のための軍事行動であり、天誅組はそのクーデターの先遣隊を自認するものであった。したがって大和行幸が中止になったいまは、天誅組は後続の本隊を失ったまま、宙に浮いて、一挙に吉野の山中に孤立させられることになった。八月十八日の政変のことをもう一日早く、五条代官所を襲撃する以前に知らされていれば、天誅組は引き返して恭順の意を表することも出来たかもしれない。しかし、鈴木代官を殺した上に、代官屋敷も焼き払ってしまってからでは、もはや引き返すべはない。／勿論、八月十八日政変は天誅組など、浪士や百姓の一揆集団の命運を狂わせただけではない。その最も深刻な影響は、長州藩の勢力失墜と土佐勤王党の潰滅をもたらしたことである。	〔同上〕
3035	2955	※19	戦前の国定教科書には朝廷内の勢力争いとか薩摩の陰謀など書いてあるわけがなく、おそらく先生もよくは御存じなかったのであろう。 戦前には知られなかつた史実もいろいろと明らかに	〔同上〕

である……。〕

京都では一層驚くべき政局の転換がおこなはれてゐた。すなはち、大和行幸御親征が中止になり、長州藩は堺門警備を罷免され、三条卿以下十八人の革新派の公卿たちの参朝も停止された。このやうな急激な政局転換の措置がどのやうにしてとられたか、その具体的な記録は一切残されてゐないので、ハッキリしたことは何もわからない。明らかなことは、大和行幸は何度も繰り返したやうに実際は倒幕クーデターであるから、幕府としては是が非でもこれを食ひとめなければならなかつたこと、そして大和行幸が中止されれば、その先遣隊を自認する「天誅組」は一挙に孤立させられ、敗北する他はなくなつたといふことだ。だが、天下の形勢からいへば、天誅組など浪士や百姓の一揆がどうならうと、まだそれほど大したことではない。この政変のもたらした最大の影響は、長州藩の勢力失墜と、土佐勤王党の壊滅とである。

※19
維新史のなかでこのへんは最も不鮮明なところであらう。
私たちの知らなかつた史実もいろいろと明らかにさ

4518	4504	4488			4364	4001	2	3868	3441
されている。	家族ぐるみの従軍は大変であるが、一家を上げて戦う決意は固かったのである。	老いとともに孤独になって行く父親の心情が	この「建白」は長州の京都復帰に関するものであったであろうか。いや、それともその頃、土佐では武市瑞山釈放の請願運動が、大石弥太郎、清岡治之助、同道之助などによって激しく行われていたから、「建白」はそれについてのものかもしれない。	この「廿人計リ死シテ」というのは何か。私はこれを野根山の二十三人の郷士が斬首されたことを指すものかと思ったが、それに対する野崎の返答をつき合せてみると、やはりこれは吉田東洋暗殺の容疑関係者を指すと考えるべきだろう。但しこの事件で当時、投獄や類属預りになっているものは、瑞山を含めて十五人で「廿人計リ死シテ」というには数が足りない。それを瑞山があえて「廿人」と言ったのは、事件の背後に山内家の公子連枝や国家老が五、六人つらなっているというその人数を加えたものであろう。つまり瑞山は、このように答えることで、野崎の糺問を暗々裡に肯定すると同時に、自分がこれを認めるからには、その公子連枝や門閥家たちも自分らと一緒に死なければならないはずだが、藩としてはそれでもいいのか、と居直ってみせたわけであろう。野崎は、それに対して少しもひるまず、屏風のかげの容堂の意向も代弁して勝ち誇ったように言い放つ。	この「廿人計リ死シテ」といふのは、**野根山の**二十三人が無法に斬首されたことを指してゐる。しかし、そのぐらゐのイヤ味を屏風のかげの容堂に言つてみたところで、この勝負は瑞山の負けである。もはや瑞山は手の内を完全に容堂に読まれてゐる。右の返答は、瑞山が吉田東洋暗殺に当つて藩主の連枝や上層部と連合してゐたことを認めたも同然であらう。野崎は、屏風のかげの容堂を代弁して勝ち誇つたやうに言ひ放つ。	れてゐるやうだ。	家族ぐるみの従軍は一見、気楽のやうであるが、
三月七日（推定）づけで、	〔同上〕	この城下滞留が郷士の	〔同上〕	駅初の試乗を止められたくらゐで、何も郷士を辞職するほどのことでもなささうだが、	〔同上。但し　野根山の→ついこの間の野根山の〕	息子たちの将来を気づかふ父親の心情が	〔同上〕	三月七日付けで、	
瑞山が慨嘆しているのは、そのことであろう。		この「建白」はやはり長州の京都復帰に関するものであつたと想像してもいいだらう。		三月七日づけで、					
				〔同上〕					
								瑞山にしてみれば、そのことがひたすら口惜しくて耐らなかつたのであらう。	

451 10	ところでこの手紙、じつは原本には「七日」という日附だけはあるが、「月」の記入はない。ただ、『武市瑞山関係文書』として公刊された活字本では、これを「三月七日」と推定しており、私もそれに従ったまでである。しかし、この日に覚之助が入牢したとすると、さまざまの点で疑問が出てくる。一般に覚之助の山田町獄入牢は島村寿之助と同日、もしくはそれと前後した頃と言われているのであるが、島村寿之助の南会所獄入牢は、次にかかげる瑞山の妻冨子にあてた三月二十八日（推定）づけの書簡によっている。すなわち、 ※20 三月二十八日に覚之助が入牢したものとすると、この空白の間に、 ここまでで、二十五年間書きつづけられてきた文助の日記は終っているのである。文助は、文久二年、嘉助が吉田東洋殺害後脱藩したときにも、一年間でたった三行しか日記の記述がなく、このことからかえって私は文助の傷心ぶりを察することができるように思った。そしてこんども「五月二日　雨。覚之助出府。同　三日　曇。」で、日記全体の筆を擱いているところから、ここで何か文助が大きな衝撃をうけることがあったものと想像したくなる。あるいは覚之助は、この五月二日に「出府」して、そのまま入牢したのではあるまいか。なお文助は、日記の欄外に物価のことなどを書きつけた他、最後に次のようなことをしるしている。 覚之助も嘉助も竹村東野の塾で学んでいたが、他に東野の門弟として、中岡慎太郎、大石弥太郎、本山只一郎、土方楠左衛門（久元）、宮地宣蔵、森新太郎、池知退蔵などの名が上っている。東野自身は別段尊攘家ではないが、東野塾はさながら勤王党の巣窟の観がある。	452 6

4559　そんなときに

4561　※21

4581　※22

4612　しかし、この手紙の「きのふは安岡も出るといふ事で有つたげな」という言い方は、同囚の者を気づかうというより、何処か遠くにいる人間のことを聞き伝えている感じである。他にも「かず〳〵」の容疑者が糺問に「出て」いると聞いていたが、それが誰々であるのか誰一人も気づかなかったというのは、糺問の場が瑞山の拘置されている南会所の内部にあり、そこへ「出」される連中が、よそから――例えば山田町獄から――つれて来られたからであろう。ところで、ここに「きのふ」とあるのは、手紙の日づけから言って四月二十二日に当るわけで、そうなると文助日記の、

4621　※23

4665　またそれが打ち消されたりといった

4677　瑞山は突如切腹を命ぜられた。いや、三月二十八日に「御見つけ」の認定を下されてから二箇月半ぶりのことだからこれは「突如」ではなく、「つゐに」というべきかもしれない。

〔同上〕

文助は少からず気落ちがして、そのために日記を書きつづけるハリも失つたものであらう。そんなときに、

4561　※21

4581　※22

4612　しかし、この手紙の「安岡も出るといふ事で**有つたげな**」といふ言ひ方は、同囚の者を気づかふにしては何となくヨソヨソしい。いや、これは別段ヨソヨソしい言ひまはしではなく、不確実な伝聞を「**有つたげな**」といつてゐるだけだとしても、牢内の覚之助が糺問に出廷するといふことであれば、「かた〳〵出ており候よし聞き候へども、だれも気づかず候」といつたアヤフヤなことではなく、もつと適確なことが瑞山に伝へられてゐてよささうである。したがつてこれは、仮釈放になつてゐる覚之助が糺問のために呼び出されたが、他の連中も糺問に出されてゐたと聞いてゐるのに、覚之助には誰も気がついてゐなかつた、と**言ふやうに**読めるのではないか。とくに、この「きのふ」といふのは四月二十二日に当るわけで、さうなると、文助の日記に、

4621　※23

4665　或ひはまた覚之助のやうに一時仮釈放になつたりといつた

4677　瑞山はつひに切腹を命ぜられた。三月二十八日に「御見つけ」の認定を下されてから二箇月半ぶりのことである。

〔同上〕

4561　※21

4581　※22

〔同上。但し　有つたげな→有ったげな　言ふやうに→いふふうに〕

頁	行			
4	15	(1)『安岡章太郎集』第九巻		
5	3	覚之助には四人の子供があったが、		
7	2	※24		
16		子供の将来を案じると同時に、それによって両親の心を慰めようという気持であろう。		
28		帰国の方途を探していた		
43	1	「攘夷」をアメリカ独立戦争で説明しようというのは、今日のわれわれには奇想天外なものに見えるが、攘夷が幕藩体制を揺がし民族の独立をうながすとい		
468	2			〔同上〕
474	1			三年も四年も手間どったりしたのは、まことに優柔不断とも何とも、おはなしになりませんや、
474	3			白札郷士ふぜいの身分で天下国家を論じ、自分に向つて勤王になれと説教したりする瑞山のことが、
		『武市瑞山関係文書』によれば三日と十日と妻と姉とにあてた短いものが二通あるだけだが、横田氏の推定では連日、とくに二日と十日には昼夜二通ずつ書いている。十日、つまり刑の前日の昼の書簡は次の通りであるが、これを見ても（また横田氏の十日夜と推定する手紙を見ても）、		
		三年も四年も手間どったのは、まことに優柔不断とも何とも、お恥かしい次第である、		〔同上〕
		吉田東洋殺害の確証は眼の前に見えているのに、最後までそれを摑めないまま、「見つけ」で断罪せざるを得なかったことが、		〔同上〕
			(2) 単行本『流離譚』下巻	
		※24		
		なにか遺書をつづつてゐるやうでもある。		〔同上〕
		本卦帰りを目指してゐた		
		〔同上〕		
			(3) 初出『新潮』	
			それにしても、ここに死に対する恐怖や焦燥感のやうなものが、全然といつていいくらゐ見当らないのはなぜだらう。これは何も覚之助に限つたことではなく、当時の人の書き遺したものをみて、自分が死に脅えてゐるといつたことを述べたものが殆どないのは、やはり驚くべきことではないだらうか。無論、強がりや、痩せ我慢はあるであらう。この「養気ヲ作ス歌」にしても、とくに後半はひたすら勇ましがつてばかりゐるやうで、詩としては空虚な感じがする。ただし覚之助は、ここで「養気」をつうじて生き抜くことを歌つてゐる。「此気、餒ウルベカラズ、餒エザレバ困難に堪フ」これは必ずしも痩せ我慢とか、強がりとかいふものではあるまい。／覚之助には四人の子供があつたが、
			※24	
			〔同上〕	
			〝本家がへり〟を目指してゐた	
			アメリカ独立戦争を「攘夷」といつてゐるのをアメリカ人が聞いたら、どんなにか驚くことであらうが、攘夷をナショナリズムとか、国のアイデンティ	

うのは、当時の尊攘家にとっては極めて常識的な受け入れやすい道理であったろう。何にしても、攘夷が「皇国の私言」から転化して「宇内各国」のナショナリズムに通じるものだということになれば、それが民権思想に発展するのは、あと一歩か二歩かの距離である。

とは、よくも言えたものだ。

〔同上〕

50
4

平井善之丞、小南五郎右衛門などが馬淵嘉平の「**オコゼ組**」の生き残りで、門閥派に睨まれて藩の主流からはずされ、その後擡頭した吉田東洋たちの革新派「新**オコゼ組**」からも圧迫されていたというのは、以前に述べた通りだ。

〔同上。但し　オコゼ組→ヲコゼ組〕

55
4

どうにもならなくなっていたわけであろう。

〔同上〕

57
1

革新派の事実上の首領というべき山内容堂は、西郷隆盛が討幕同盟の勧誘に土佐へやってきたときにも加盟を断り、また京都小御所の会議でも最後まで武力討幕に反対したと伝えられるが、その理由が本当のところ何であったのか、私にはわからない。容堂は西郷にも「当藩は関ヶ原以来、徳川家の恩顧をうけているから、薩長両藩のようなわけにはいかない」とこたえたというが、容堂がそんなことを何処まで本気で考えていたのだろうかと思うのである。

というのは容堂は、慶応四年閏四月、野中太内が討

〔同上。但し　かったものか。→かつたものか……。〕

58
4

ティーとかいふものと考へれば、この中岡の言ふことは、今日でも説得力があるのではないか。

とは、よくも後藤が言へたものだ。いつたい何が「飄然として」であらうか。

天保の頃、「おこぜ組」と称して藩の財政改革を企図する一派があつたが、禁制の「心学」をとなへたといふ理由で、これに加担した者は全員、投獄もしくは禄格没収された。平井善之丞、小南五郎右衛門などは、そのとき辛うじて連坐を免れたものの、門閥派に睨まれて藩の主流からはづされた。その後、擡頭した吉田東洋たちの革新派は「新おこぜ組」と呼ばれたが、平井・小南などの旧おこぜ組の生き残りは、この新おこぜ組からも圧迫され、そんなことから武市瑞山など、勤王派の郷士と接近するやうになつたものだ。

どうにもならなくなつてゐたわけであらう。それにしても、佐々木のかういふ処世は、何か情報を素速く捉へて敵味方の間をたくみに行動する忍者の素質をおもはせるものがあつて面白い。

革新派の事実上の主領といふべき山内容堂も、西郷隆盛が討幕同盟の勧誘に土佐へやつてきたときに、「当藩は関ヶ原以来、徳川家の恩顧をうけてゐるから、薩長両藩のやうなわけには行かない」とこたへてゐる。容堂が最後まで武力討幕に反対した理由が本当のところ何であつたか、私は知らない。さういへば毛利氏や島津氏が関ヶ原で敗けて広大な領地を取り上げられたりしたのとは逆に、戦功によつて掛川六万石から土佐二十四万石の大名にとりたてられた山内氏が、徳川家に怨恨を抱く理由はまつたくな

幕軍の出兵にあくまでも反対するのに腹を立て、これに切腹を申しつけているからだ。野中は吉田東洋の弟子であり、藩政改革につくした一人であって、それまでは容堂の信任も厚かったはずである。それが討幕に反対して、多少激烈な言葉づかいがあったとしても、普通ならそんなことで切腹を命じられるとは思えない。いったい野中太内の何が、それほど容堂の激怒を**かったものか**。想うに容堂は、末端の末端ともいうべき傍流の血縁から藩主の地位についたことで、劣等感につきまとわれていたというが、単に自分が正系ではないという以上に、母親を通じて体内に土佐人の血が流れているということにも、深い自己嫌悪のようなものを抱いていたのではないだろうか。そうでなくとも、差別感が地縁血縁に結びついた場合には抜き難いものになる。まして容堂は、藩主でありながら自身の中に差別された土佐地元民の血液を意識させられていたとすれば、「当藩は徳川家の恩顧をこうむり」などと口にするたびに心の何処かで自己撞着を禁じ得なかったのではないか。だからそのことに、たといどんなに間接的にでも触れられると、激発して、しばしば苛酷な所行に出る。しかも、	1151	10711	1079
私は最初、多少の疑問をおぼえた。 ※25 いわば内閣を交代させたことになる。		
多少の疑問が残る。 ※25 いはば内閣を交代させたことになる。それだけに、この江戸での状況調査をめぐつて、江藤と小笠原の二人が、絶えず牽制し合つてゐたとしても不思議はない。それはただの個人的な立場をこえて、肥前と土佐と藩の利害にかかはる事柄だつたからである。とくに小笠原は、盟友の板垣が東海道軍との確執を噂されてゐた**折柄**、俊敏な江藤がこの状況をどのやう		
い。しかしそれを言ひ出せば、掛川衆でかためられた土佐藩上士が、長曾我部の遺臣を自認する郷士との対立や疑念も解消しやうがないことになる。事実、吉田派のなかでも野中太内などは、頑強に幕府を支持して、勤王派の討幕軍にはあくまでも反対しつづけた。ところが、さういふ野中は、最後には容堂の怒りに触れて切腹させられるのである。／実際、藩政の終焉期に矛盾撞着した態度をとつたのは、容堂だけではないであらう。しかし、血縁からいへば末端の末端ともいふべき傍流から、まるで臨時雇ひのかたちで藩主になり、養父豊資とその一党から絶えず監視され頭を抑へられてきた容堂は、自分が正系の藩主ではないといふ劣等感につきまとはれてゐたらしい。しかも自身の才腕に恃むところがあるだけに、自尊心の傷つき方も大きく、それに触れられると激発して、しばしば苛酷な所行に出る。幕藩体制に対しても、自分が傍流であるといふところから批判的である一方、他人がこれを批判するのを許さない。なぜなら、さういふ場合は藩主として自分自身が批判されてゐるやうに受けとるからである。	〔同上〕 〔同上〕 〔同上。但し　折柄→折り柄〕	

| | | |

		ように疑われてもいたのかも知れない。『高知県人名辞典』によれば、高見弥一郎は明治三年イギリスに留学したとあるが、薩摩藩士で明治の外交官寺島宗則の履歴書の慶応元年ロンドン滞在中の記事のなかに、「余は町田（民部）と同宿し、又、生徒中の土佐人高見弥市と同宿す」とした部分がある。この高見弥市は高見弥一郎、すなわち大石団蔵のことではないか。とすれば、団蔵は明治三年ではなく、慶応元年に薩摩藩の留学生十五人のなかにまぎれこんで英国に渡っていたわけだ。慶応元年は武市瑞山以下、土佐勤王党の主力が処刑されたり下獄したりした年である。団蔵は、八月十八日の政変には別段かかわり合いはなかったとしても、元治元年以降、武市以下が獄内で糺問を受けていたことは知っていたはずで、ロンドンの宿ではどんな心持で過ごしていたのであろうか……。いずれにしても大石円は、その後、団蔵のために何かと肩身のせまい想いをさせられたことであろう。私は、円と団蔵とはたしか従兄弟同士になるはずだ、
3904	3881	
		事実かどうかはさておき、その示唆するところは興味深い。
3822	3810	寺島秀之助は、西南戦役のとき警視庁の巡査をあつめていわゆる「抜刀隊」を編成したが、軍隊では大尉どまりで大して出世はしなかった。
		しかし私が、新聞の葬式の発案者が道太郎ではあるまいかと想像するのは、そのような凝り性のせいばかりではない。
		それは自己の悲痛な心事を新聞に託して笑いとばしたいという諧謔から出たものであったと思われる。
		想像すると滑稽な気もするが、
		客との応答に困らぬよう訓練もしたというが、もともと土佐の女というのは政治が好きで理窟っぽいところがあり、維新前の頃から、「小高坂辺のむすめ
3359	3310	
		〔同上〕
		〔同上〕
		〔同上〕
		〔同上〕
		〔同上〕

	斬りに行つたし、また天誅組を吉野の山中で孤立させた八月十八日のクーデターは、この奈良原と高崎正風とが会津藩と連絡をとつて起こしたものだといはれてゐる。無論、だからといつて団蔵が、奈良原からこのクーデター計画について何か聞かされてゐたとは思へない。しかし団蔵が、那須や嘉助から天誅組に加盟を誘はれながら、これを断つたうらには奈良原などから何らかの示唆があつたものと考へていいだらう。しかも、八月十八日の政変を契機として土佐藩内では勤王党そのものが徹底的に弾圧されることになるのだから、団蔵が瑞山の一党から白い眼で見られたとしても止むを得まい。そして瑞山の盟友大石円は、この団蔵のために何かと肩身のせまい想ひをさせられたことであらう……。それにしても、円と団蔵がどういふ縁戚関係になるのか、私は知らなかつた。たしか従兄同士になるはずだ、
	その示唆は適確であり、甚だ炯眼であるといふべきであらう。
	たしかに、寺島宗則は薩摩人だから長州人に受けが悪いのは常識でもわかることだし、おまけに寺島は外交官であつても軍人ではない、
	〔ナシ〕
	その心事はなかなかに悲痛なものがあつたであらう。
	なかなか興味のあるところだが、
	客との応答に困らぬやう訓練もしたといふことだ。

		まで、きんのふ（勤王）とか国家の為とか、あわてさがし、若き男とくらがり（にて）咄ししたがり」と、坂本龍馬をして嘆かしめるような風潮があったわけだから、それが民権の壮士を客にとるようになった日には、どんな騒ぎになるか。革命熱と情欲とそれに商売気とがゴッチャになって、政論も欲情も果てしなく昂進して行ったにちがいない。	
391 3	〔同上〕	よほど上機嫌になっていたために違いない。	
391 9	〔同上〕	当時の土佐人の遊び振りや金のつかい振りの荒さもさることながら、時代の変遷とともに社会層の交代も激しかったことを語ってもいるだろう。	
418 3	〔同上〕	又彦はそのためにランプの扱い方をよく知らなかったのか。いや、おそらく又彦は、旅の疲れでランプを消し忘れて眠ってしまったのであろう。	
419 2	〔同上〕 何かガッカリしたやうな拍子ぬけの気持	私は見てはならぬものを見た気がした。	
483 12		何かガッカリしたような気持	
		よほど機嫌がよかつたからに違ひないが、主人の寅八の客への取り入り方も甚だ巧みだつたのであらう。	
		いかに当時の人たちの遊び方がはげしく、金づかひが荒つぽかつたかといふことだらう。	
		又彦はそのためにランプの扱ひ方をよく知らなかつたのであらうか。	
	〔同上〕	私は暗い気持になつた。	

（完）

＊(1)は『安岡章太郎集』第八巻・第九巻、(2)は単行本『流離譚』上巻・下巻、(3)は『新潮』初出「流離譚」をあらわす。

※16

(1) その結果、薩摩藩は受持であった乾門の警備から下ろされ、薩藩士は九門の出入を禁止されることになった。／いずれにしても、この事件は、これまでのいわゆる「天誅」とは違って、仮に田中新兵衛がその刺客の一人であったとしても、新兵衛がその同居者など二、三人の者を誘い合せて仕出かしたというような単純なものとは思われなかった。もっと大掛りで複雑な政治的陰謀のテロであることは、誰しもが考えつくところであり、その黒幕として薩摩藩士藤井良節の名や、さらにその背後にいる大立者として島津久光、青蓮院宮などの名が、尊攘派の間で取り沙汰された。／藤井良節は当時、薩摩藩邸の取締役である。もし藤井が姉小路暗殺の黒幕であったとすると、薩藩邸にかくまわれている那須、大石、嘉助たちの立場は、甚だ微妙なものになったわけだろう。とくに那須は、現場に落ちていた刀を田中新兵衛の持ち物であると証言しているのだから、何とも居心地の悪いおもいであったに違いない。もっとも藤井は、元来穏健な尊攘派というべきで、決して佐幕派でもなければ公武合体派でもなかったようだから、那須についても別段、悪意は持たなかったのかもしれない。また、事件の直後、那須だけではなく、大石や嘉助も、大勢の土佐藩有志とともに現場に駈けつけたように述べた本もあるが、実際はどうだったのか、そのへんのことは良くわからないのである。／覚之助は、密事御用として姉小

路公知のそばにいたらしく、石清水八幡行幸のときにも姉小路卿に随従して、「天朝より烏帽子布衣を拝領」したとあるから、覚之助も当然、事件後現場に駈けつけた一人であったろうし、そこで那須や嘉助に出会ったことも考えられる。もし覚之助の手紙で、そういうものが残っていればと思うのだが、残念ながらそれはない。その頃の覚之助の手紙で残っているのは、前に上げたように六月十八日、同二十六日、七月十二日、同二十六日、八月二十四日などの五通である。事件から最も近い六月十八日づけのものでも、すでに一と月ちかく経っているわけで、これには事件に係わりのあることはまったく書いていない。もっぱら馬関戦争（第一次）のことばかりである。／一、当月（六月）五日、馬関ニおいての事、この間、長州藩野村和作と申す男、上京ニ相成り、たしかなること相分り申し候。／仏軍艦、弐艘突入。頻リニ砲発いたし、つひに我が砲台を打ち崩し、それよりバツテイラニ乗り上陸いたし、烈しく相戦ヒ、敵身方とも小銃ヲ以つて頻りニ打ち合フ。この度の勝敗ハ相分り申さず候へども、異人つひニ引き取り申し、退却しだい死人ヲ尽く船ニ積ミ込ミ候場合、船ニ乗リおくれ狼狽致し候ものヲ三人、長州手ニ生け捕り候ところ、皆々日本人ニテ、異人の服ヲ着し候趣。未ダ御吟味ニも相成らず候故、何国の人か相分り申さず候へども、いづれも関東語ヲつかヒ候とか申し、実ニ安からざる事。しかし生け捕り候ハ愉快なる事ニテ御座候。（以下略）／馬関戦争のとき、損傷した敵の軍艦を幕府の造船所で修理し、その軍艦がまた長州を攻撃したというのをきいて、坂本龍馬が「誠になげくべく、あきれはてたる事」と痛憤したことは有名であるが、フランス艦に日本人が乗り組んで長州の砲台攻撃に上陸してきたという話は、私はこの手紙で初めて知った。「いづれも関東語ヲつかヒ候とか」とあるのを見れば、江戸か横浜の人であろうか。そういえば横浜で英字新聞を発行していた**ジョセフ彦**は、従軍記者としてアメリカ艦に乗りこみ、アメリカ海軍の発射する大砲が長州艦に命中するたびに快哉を叫んだという記事が残っているが、これは彦蔵が**アメリカに帰化した日本人の第一号であったから**、というより、当時の江戸人一般の感情として、長州は外敵で、それを撃つアメリカ軍は味方の同盟軍というようなものであったのだろう。生け捕りになった人の証言でもあれば読みたいところだ。ところで、その八日後の六月二十六日づけの覚之助の手紙は、馬関戦争のこともだが、姉小路卿暗殺に青蓮院宮が関係していた疑いがあるとして、青蓮院宮の家来二人が逮捕されたことを述べている。／……長州も五日後の事、格別沙汰もこれなく、この間廿三日の夜、中川宮（青蓮院宮）様の内、山田勘ゲ由、伊丹蔵人の両人、御格懸りヲ以つて御召し捕りニ相成り、東町奉行エ御預けニテ揚屋入り仰せつけられ候。これは全体、怪しき事どもこれあり、姉殿の一条ニモ何ぶん関係致し居り候との御不審ヲ以つて、右の次第。しかし、これと申す確証ハ承り申さず候。（以下略）／山田、伊丹の二人がつかまったのは、兵庫の楠正成の墓参りをすると称して、じつは薩摩へ逃亡をくわだてているという情報が伝わったためである。と土方久元（楠左衛門）の談話にある。つまり、この二人は青蓮院宮の命をうけて田中新兵衛などを使って姉小路卿を殺させたのだというのである。二人は奉行所で、ふんどしまで取り上げられて調べられたが、覚之助もいうように「これと申す確証」は何もないので、そっと放免にしてしまったらしい。しかし、事件後一と月以上もたって、こんな何でもないような些細な事柄が取り上げられるところに、この事件の根の深さがあるといえるだろう。ところで、覚之助自身は姉小路卿の暗殺をどう考えていたのか？　覚之助の手紙は、いつもどういうわけか自分の意見らしいものは、ほとんど述べていない。いや、意見だけではない、自分の行動についても、文助には重大なことをわざと隠しているのかと思われるフシがある。／たとえば、この六月の上旬、馬関戦争と並んで大きな事件は、江戸から小笠原図書頭が幕兵千六百を率いてイギリス船で大坂に上陸し、大挙上京を計ったことである。表向きそれは、小笠原が生麦事件の賠償金二十七万両を独断でイギリスに支払ったことについて、在京の将軍家茂に弁疏すべきことがあるというのだが、実際はこの三月以来、京都で人質同様になっている家茂を武力にかけても救い出そうというのであった。当時、長州藩の精兵は全員馬関へ行っていて、京都はガラ空きの状態だったから、幕府が京都を尊攘派から奪い返そうとすれば、絶好の機会である。当然、朝廷は恐慌を来たし、尊攘派の諸藩士や浪士は憤激した。もし小笠原が率兵上京を強行するようなら、こちらは全勢力を結集して反撃するという。不穏な情勢におどろいた幕府は小笠原の上京を止めたが、小笠原はそれを押し切って淀まで来てしまった。一方、尊攘派もテ

ロリストが淀に潜入するし、吉村虎太郎、松本奎堂、池内蔵太、上田宗児、宍戸弥四郎といったこのあと天誅組で活躍する脱藩士たち十数人が伏見に集合した。長、土両藩は淀に探索を出したが、このとき土佐藩から藩主名代山内兵之助の命で淀に出張したのは島村寿之助、安岡覚之助の二人だということになっている。しかるに覚之助は、父宛ての手紙にそんなことは一行も書いていないのである。／どの手紙も、「大暑の節ニ候処」とか、「暑気凌き難く候処」とか、「朝夕ハ大分減暑ニ相成り候処」とかいう書き出しで、あとは判で押したように、「迂児、相変らず在勤候間、御放念遊ばさるべく、扨て時勢ハ先づさしたることも御座なく候」というようになっている。しかし実際は、この時期は「さしたることも御座なく」どころではない。これは覚之助がよほどノンキな性分であったというより、父親に心配をかけまいという心づかいのせいであろう。しかし、小笠原図書頭については充分懸念するところがあったらしく、七月二十六日づけの手紙で次のように述べている。／……この節、大分時勢ニ移り逢ヒ、薩藩よほど振ひ立ち候趣。越前も先き頃ハ前君（松平春嶽）ども御上京と申しテ、物議紛々の処、過日、米沢藩ヨリ探索方、越前エ参り、段々、君側の人などエ面会、議論いたし候処、何分ニも（春嶽は）海航（開港）論ニテ、決シテ今ニおゐて神州の小国ニして兵ハ不練、且つ国論ハ一定致さず、一ツの勝算もなきに、攘夷など申すハ実ニ朝廷の御無理など、申す。（中略）既ニ六月十日ニ（春嶽は）彼地発程ニテ、兵数壱万騎ほど召し連れ上京のはずに候処、大樹公ニも漸々御帰府ニ相成り候ゆえ相扣へ候由。小笠原図書頭様も、同月十日ニ浪花より乗船ニテ関東エ引き取り、これハまた再勤と申す説、頻りなり。実ニ不安、益々幕府の反状ハいちぢるしき事ニテ御座候。……／とあって、以下、七月二日、三日の両日にわたった薩英戦争の模様を述べているのであるが、春嶽の率兵上京を、小笠原図書頭の上京や、外敵の侵攻と関連させて見ている点、当時の在京尊攘派の危機感がよくあらわれているようだ。米沢藩の探索者が会った「君側の人」というのは村井氏寿のことでもあろうか。村井によれば春嶽の上京を企画したのは横井小楠で、その目的を簡単にいえば、これまで京都には外国人を一切入れていなかったのだが、その京都へ諸外国の公使を召集し、わが方は将軍、関白以下、幕府と朝廷の要人が列席して、開港条件その他についての公明正大な国際会議を催そうというのである。これは当時の情勢からみて到底実現は不可能な、むしろ空想的発案であったように思われるのだが、果して越前藩内でも反対論が出て中止になり、企画者の小楠は責任を負って越前藩を去ることになる。しかし、京都での国際会議うんぬんは表向きのことであって、実際の動機は小笠原の将軍救出をはかった率兵上京に春嶽も張り合おうということのようである。前年来、将軍の上京を最も強く主張したのは春嶽であったが、将軍は京都で攘夷派の人質にとられたかたちになって九十余日間、江戸へ帰ることも許されず、春嶽の面目玉は丸つぶれになった。春嶽としては、その不名誉を恢復するためには小笠原を上廻る大規模な率兵上京を敢行すべきであるというのである。勿論、春嶽が一万もの兵をあげて上京するということになれば、小笠原も幕府の威信にかけて**座視してもいられまい**。覚之助が、いったん江戸へ引き上げた小笠原について、「これハまた再勤と申す説、頻りなり。実ニ不安、益々幕府の反状ハいちぢるしき事ニテ御座候」と述べているのは、右のような事情を指しているものと思われる。／結局、春嶽の挙兵上京は、前関白近衛忠熙の「越前藩が大挙上京し、正しい国是を立てようという意図はわかるが、急いては事を仕損じる。いま暫く時機をまつように」との指図で、一時見合せることになり、その間に藩論が変って中止となったものだ。しかし、春嶽や小笠原の大挙率兵の上京計画は、覚之助の手紙からも窺われるように、すでに尊攘派の間に知れ渡っており、いきおい尊攘派もそれに対抗してハッキリ倒幕を目的とした行動を起すことになる。こうしていわゆる「天誅組」、大和義挙旗上げの機が迫ってきた。

(2)　同右。但し　また、↓それとも那須たち三人は、その頃はもう薩藩邸を出て何処か他に隠れて住んでゐたのであらうか。また、ジョセフ彦↓ジョセフ彦蔵　アメリカに［…］から、↓アメリカかぶれしてゐた　座視してもいられまい。↓もう一度、率兵上京をはかることにならう。

(3)　……島津公、因循ながら当春末に上京に相成り候ところ、因循の事なども候へば、前と違ひ（朝廷の）御依頼も鮮く、人望も放れ、万事思ひのままならず、大不平にて直に引き返し帰国に相成り候。畢竟は姉小路殿、三条殿、御激しき故、因循者とは議論合ざる故なり。且、薩御親類の近衛関

白殿、御辞職に相成り、旁以つて大イに天下に望を失イ候わけなり。栗田宮（青蓮院）様、先達てまでは極めて御激論、御正論に候ところ、かねて容堂君を誅ケし候薩人某等、頻りに宮様へ罷り出で種々奸計を廻らし、薩議論に御同意遊ばされ候様、終に申し傾け、いやましに諂諛仕り居り候ところ、朝廷の事存分に相成らざるについては、機を窺ひ、宮様を押し立て、天下に旗を翻し候巧か、右の様なる虎狼の心を醸し候故、只今縛につき居り候軽卒二三人の謀略までにては有るまじく、謀主は国に有るか、又は滞京重役の者の巧み候か也。それにより、天朝より屹度御譴責に相成り、滞京重役の者五六人自殺つかまつり、そのうへ厚く御詫び申し上げ候はば事足り申すべきか。もし屈服仕らざる時は、朝命を以て列藩へ仰せつけられ、不日、京師薩邸を打潰し、そのうへ追々本国へ兵を指し向け候議論也。何にせよ大変〳〵〳〵。／これは那須信吾の手紙と称するものだが、日附も宛名もないうへに、島津久光や薩摩についての批判も極めて概念的に過ぎるところからみても、偽作の疑ひが濃いのであるが、当時の世評や志士たち一般の心情は、こんなものではなかつたかと思はれる。／つまり、この事件は、これまでのいはゆる「天誅」とは違つて、田中新兵衛やその同居者など、軽卒が二、三人でやれることではなく、もつと大掛かりな政治テロであることは、誰が見ても明らかだつたのであらう。これによつて薩摩藩は乾門の警備から下され、薩摩藩士は九門内の出入を禁止された。／それにしても、このやうなことになつては、薩摩藩邸にかくまはれてゐる那須や大石や嘉助たちは、さぞかし居心地の悪い想ひをしたことであらう。なかでも現場に落ちてゐた刀を、田中新兵衛の持ちものと証言した那須の立場の苦しさは、想像の他であらう。那須は、すでに前年養父や実兄にあてた手紙にもあるやうに、薩摩邸内の下にもをかぬ丁重なもてなしに恐縮と困惑を覚えてゐる。おそらく三人とも生涯にまたとない贅沢な待遇をうけたであらうが、何か過分の恩誼を押し売りされるとまではいはなくても、こんなことをしてもらつてゐてもいいのだらうか、といふ不安は漠然とながら絶えず感じさせられたことであらう。しかし、このやうな田舎者の三郷士を脅えさせるほどの丁重な待遇も、慣れてくるにしたがつて次第に腹立たしいものに思はれるやうになつてきたのではないか。当時、薩藩邸内にどんな人物が集つてゐたか、くはしいことはわからないが、前掲の日附けのない手紙に、「かねて容堂君を誅かし候薩人某」とあるのは藤井良節のことで、その藤井はこの薩藩邸の取締り役である。那須たち三人はこの藤井の世話になつて暮らしてゐるわけだから、もしこの手紙が本当に那須の書いたものだとすると、土佐の脱藩三郷士は、この姉小路暗殺事件が起るまへからずゐぶん複雑な気持で日を送つてゐたことになる。勿論、藤井がこの三人の生活を直接監督するわけはないにしろ、藤井が容堂はじめ土佐藩上層部の公武合体派に接近してゐることは、何となく那須たち三人にもわかつてゐたはずで、さうなるとこの丁重なあしらひは、ひどくヨソヨソしいものにも感じられたであらう……。鹿児島方言といふのは、いまの私たちにも聞きとり難いが、土佐言葉しか知らない三人の耳には、当時の薩摩人同士の会話は、それこそ南蛮鉄舌もいいところで、何をしやべつてゐるやらサッパリわからなかつたに違ひない。那須の実兄あての手紙に、／此頃、君公様御東下ニ付き、俗物どもも御供ゆえ、当分ハ昼も往来でき申すべくと相楽しみ居り候……／とあるのは、煙つたい土佐藩の上士が江戸へいつてしまつて、昼も自由に往来できるのが、いかにも嬉しさうである。おそらく三人にとつては、自分の生れた国の言葉で心置きなく話せるといふだけでも、どんなにか気の安まる想ひであつただらう。錦小路の薩藩邸から河原町の土佐藩邸は、ほんの眼と鼻の距離である。そこに自分の兄や親戚や仲間のゐることがわかつてゐても、ふだんの彼等は邸内に入ることは無論、迂闊にそばに近づくことも許されなかつたとすれば、望郷の念はかへつて止み難かつたであらう。／姉小路卿が暗殺されたとき、大勢の土佐藩有志とともに、那須、大石、嘉助の三人も現場へ駈けつけたやうに書いてある本もある。或ひはさうだつたのかも知れない。さうだとすれば、地べたにころがつてゐる血に染つた田中新兵衛の刀を見た瞬間、那須は——これでおれたちも薩摩屋敷を出て行くことができる、と思つたのではないか。勿論さうなればいつ何時、土佐藩捕吏の手にかからぬとも限らぬことを覚悟しなければならないとしても……。

※17

(1) 大和行幸の勅書が発せられた翌日、八月十四日に、天誅組は**大仏で知ら**

れる方広寺境内で旗上げした。その夜、船で淀川を下って翌朝大坂へ出、河内の水郡善之祐方で一泊、ここで河内勢と合体して、翌日、大和五条の代官所を襲うことになるわけだが、八月二十日、吉村虎太郎は五条から京都の島村寿之助、土方楠左衛門、安岡覚之助の三人にあてて、次のような手紙を送っている。／「（安岡章太郎『流離譚』校異（一）（『三田國文』第六十七号）一七六頁二重線部に同じ）／この手紙は残念ながら覚之助の許には届かず、八月二十五日に町奉行所から会津藩公用方に回送された。天誅組が五条代官所を襲ってこれを占拠した翌日、八月十八日には京都で政変が起り、尊攘派の公卿や長州藩の勢力は一掃されて、京都の町々は公武合体派の手に固められている。したがって八月二十日に出されたこの吉村の手紙は、幕府側の警戒線にかかって、たちまち町奉行所に押さえられたものであろう。それにしても、陣中にあって多忙な吉村が、こんなに細ごまとした貸借の精算を友人に指示していることには感心させられる。と同時に、この貸借金の覚書には、俄かに大和行幸が決定されてから翌日天誅組旗上げにいたるまでの慌しい模様が、まことに如実にあらわれているようだ。／「一金　弐拾両也　過夜御渡申上候」とある「過夜」は、八月十三日、つまり勅命の出た当日の夜のことであろう。吉村は、このとき覚之助に金だけは渡したが、その金を大高屋に十六両二分払って残りは古東領左衛門に渡してくれというようなことは言い忘れたのであろうか。或いは、言うことは言ったが、急いでいたときのことなので、念を押して五条からこのように確認の手紙を出したものであろうか。また、大高屋へ鎧代の前金五両を置いてきたが、「若し間違ひこれあり候はば、少々のことは丹寅にて**受取り**候様、御申し聞かせ下さるべく」といっているのは、吉村は大高屋で金をいくら払ってきたかもハッキリとは憶えていないほど、あわてていたということなのであろうか。もっとも、この「丹寅」というのは、木屋町三条の吉村の寓居のすぐ近くの料理屋「丹虎」のことかと思われるが、平尾道雄氏によれば吉村は丹虎の娘を妾にしていた由。そうだとすれば、この「少々のことは丹寅にて**受取り**候様」というのは、じつは大高屋の勘定の間違いうんぬんというより、「丹虎の娘によろしく」という伝言を覚之助に依頼しているのかもしれない……。ところで、このとき買った鎧は吉村自身のためのものではなく、中山忠光のためのものであったらしい。

(2)　同右。但し　大仏で知られる→伏見の　受取り→受け取り

(3)　さうだとすれば吉村が、大高屋へ代金後払ひで鎧を買ひに行った理由もわかる。／ところで、この鎧は吉村自身のためのものではなく、中山忠光のためのものかと思はれる。

※18

(1)　とくに姉小路卿暗殺事件以後、三人が薩藩邸内で警戒されていたことは想像に難くない。したがって、那須や嘉助が天誅組に参加するといっても、普通の浪士たちのように大っぴらに誰彼と会ったり相談したりすることは出来ないはずで、薩藩邸と外部をつなぐ連絡係りが必要であったはずだ。そこで、そのような役割を土佐藩密事御用の覚之助がやっていたのではあるまいか――と、そんな風に私は、最初しばらく考えていた。しかし、これは間違いであった。／八月二十四日づけの文助あての手紙によると、覚之助は天誅組出陣前夜に嘉助と会って、嘉助に挙兵参加を見合せるように説得につとめているのである。もともと覚之助は、吉村虎太郎のことは、前年住吉陣屋へ本間精一郎を引っ張ってやってきたとき以来、何となく信用していなかったフシがある。こんどの大和義挙と称する計画も、お公卿さんを引き入れたりして大それたことを考えているが、計画自体は茫漠としていて何を目的とするかもわからないし、首謀者や責任者もはっきりしていないのだから、失敗するにきまっていると述べている。手紙の前半は、十七日の深夜から翌十八日にかけて起った会津と薩摩両藩による武力クーデター――八月十八日の政変――の模様を細ごまと報告しているが、それは後に廻して、河内から大和へ向った天誅組に触れた部分から引用しよう。この手紙は虫が食って穴だらけであるうえに、例によって嘉助の名前や他の個人名が一切伏せてあって、ハッキリしないところもあるが、見当をつけて読むことは難しくはない。／……大和河州辺の模様ハ、先達つて京師ニ潜伏致し候諸藩の士、当月（八月）十四日、何処かへ発程致し候。何かと事を起すつもりの趣きニテ、柴勝輩（吉村虎太郎を指すか？）もこれに与ミし候。いささか着眼のところも計りかね、そのうへ壱人堂上方（中山忠光）を押し立て候へども、□に又、然るべき謀主た

る人も承はらず候へば、所詮（成功は）むつかしく、策ハ敗るゝことと て、（嘉助と）議論ハ致し候へども、早や衆ニ盟し候ことニテ、いまさら 論弁致し候ひテも武士の意地も立ちかね、且、彼等すでニ死すべき処ヲ □久しく潜伏、よほど鬱屈の趣きニつき、たとひ賊名ヲ取り候とも、もはや約したる事なれば是非もなし。／いづれも、かく世の末に相成り候へバ、そのへんのこと、懸念致し□ハ命ハ捨てられぬもの也などと、頻りニ兄□因循論ヲ笑ヒ候やうの大括気もの□、なかなか此の段の気配と大いに異なり、決心致し、辞世の歌など詠じ、互ひニ訣飲し、**相別ル**。一向その後の左右もこれなき処、別紙（別紙は無し。おそらくは五条代官所襲撃の報道か）の通り□これあり、多分右輩の所為なるべしと存ず。模様により陳吟呉公のなす処にも相成るべく候間、笑ハれハせず。また今日の形勢ニ立ち至り候へバ、いよいよ薩邸ヲ脱し候ひて、よろしきなどニもト思□、（嘉助は）かねて命なき脱落の身なれば、決して御慨もこれなき筈なれども、併し相成るべくバ死処を得させ度く、折角苦心いたし候へども、いまさら詮なく、申すも更なり、御あきらめならるべく候。／倉卒のことにつき、（嘉助は）書状も委しくは認め申さざる由につき、そのやう御承知下さるべく候。訣飲の節、とりあへず、／なげかじな長き別れの今日とても／もと大君の御為なりせば／今明日のうち、御飛脚立ちと申すにつき、右の通り何かと要用相認むるつもりニテ、二、三日、風邪気ニハこれあり、旁がた従来ハ致さざる閨中ニテの書面、相認め候……。／これでみると、覚之助は嘉助とはそんなに度たびは会っていなかったようだ。天誅組のことも、この日、旗上げ前夜になって初めて打ち明けられたように読める。「議論ハ致し候へども、早や衆ニ盟し候ことニテ、いまさら論弁致し候ひテも武士の意地も立ちかね」というあたりに、覚之助が弟に参加を思い止まるよう説得しながら、いまさらどうしようもないという無力感にひたされてくる有様がよく出ていると思われる。それにしても、ここには大石団蔵の名前も上っていないが、「早や衆ニ盟し候ことニテ」という言葉の裏には、大石がこの挙兵に参加を誘われながら、「おれには別の意見がある」と、それを断ったことが意識されていたのではなかろうか。／大石がなぜ大和の義挙に一人だけ加わらなかったのか、その理由は無論わからない。前年四月、那須や嘉助と一緒に土佐を脱藩して以来、ただならぬ事態を体験し、文字通り死生苦楽を倶にしながら、同じ屋根の下に一年数箇月暮らしてくる間に、いつか心持の離反することでもあったのだろうか。『維新土佐勤王史』によれば、嘉助は当時京都に来ていた大石弥太郎のところへ、那須と二人でやってきて、次のような歌をあたえて立ち去ったとある。／かくばかり降りゆく世を梓弓／引き返さずばいかで止むべき／嘉助がどんな心持をこの歌に託したものか、それもわからない。大石弥太郎は団蔵の従兄で、大石と安岡の家は二里ぐらいしか離れていないから、嘉助も弥太郎や団蔵とは昔から知り合っていたはずだ。しかし、別れの歌を団蔵ではなく弥太郎にあたえたのは、やはり何か気まずい想いが団蔵との間に残っていたのであろうか。／その後の大石団蔵について、『高知県人名辞典』には、「奈良原喜八郎（繁）に保護せられて薩摩に入り、奈良原の養子となって島津家に仕え、高見弥一郎と改名した。明治三年イギリスに留学して数学を学び、帰国後私学校教員となった。同二十五年、奈良原の沖縄県知事就任により同県庁に出仕したが、間もなく鹿児島に帰り造士館（旧第七高等学校、現鹿児島大学）で教授し、後進を指導した。明治二十九年二月二十八日歿す。六十四歳」とある。／一見、何の変哲もない記述であるが、奈良原は高崎正風とともに会津藩と連絡をつけ八月十八日のクーデターの下地をつくったといわれている。その奈良原に大石団蔵が並なみならぬ世話になっているところを見ると、団蔵は薩摩藩邸にいる間に薩摩の公武合体派と結ぶようになっていたのであろうか。しかし、もしそうだとしても、これは団蔵が嘉助たちを裏切ったというより、団蔵もまた「久しく潜伏、よほど鬱屈の趣きニつき、たとひ賊名ヲ取り候とも、もはや約したる事なれば是非もなし」という心境になっていたというべきかもしれない。

(2) 同右。但し　相別ル→相寄ル

(3) 要するに、この三人を生かすも殺すも薩摩の意向次第である。しかも、何度も繰り返すやうだが、姉小路卿の暗殺以来、薩摩はその黒幕であることを疑はれて、乾門の警備から下され九門内の出入を禁止されるなど、京都での勢力をとみに失墜させられてをり、それは那須の証言が直接の原因になつてゐるのだから、薩摩藩邸としては、まさに飼ひ犬に手を噛まれたおもひであらう。これでよくも薩摩が三人を土佐へ渡さなかつたものだと

思ふが、そんなことをすれば京都での薩摩の評判がいよいよ悪くなるといふ顧慮から手控へざるを得なかつたのであらう。／どつちにしろ、薩摩は土佐の勤王派を警戒しはじめたに違ひない。かうなつては、もはや前年の暮のやうに土佐藩の者が大勢で押しかけて、薩摩藩邸の三人のところで宴会をひらいたりすることは許されなかつただらうし、それどころか覚之助が弟を慰問しに行くことさへ遠慮しなければならなかつたのではないか。／もう一度、前に戻つていへば、吉村が五条から出した手紙に、「安岡君へ」として、／一金　弐拾両也　過夜御渡申上候／とある、その「過夜」は八月十三日、つまり旗上げの前夜であるとして、金を渡した場所は何処だらう。吉村が土佐藩邸を訪ねたことも考へられなくはない。しかし義挙は旗上げするまで、中山忠能も気がつかないほど極秘にされてゐたこと、それに吉村が義挙の事実上の総指揮者であることを考へれば、吉村が覚之助のところへきたといふより、覚之助が吉村に会ひに行つたとるべきだらう。しかし、その場所は、木屋町の吉村の旅館だらうか。さうかも知れない。いや、旗上げの前夜は吉村は多忙なはずで、久坂玄瑞から三十両を借り受けたのも十三日のことであつたとすれば、或ひは覚之助は吉村と一緒に久坂を訪ね、吉村が借りたうちから即座に「鎧代に」といつて二十両を渡されたのかも知れない。だが、これはまたあまりにも目まぐるしい。いくら「天誅組」が貧乏な浪士の集団だといつても、旗上げの前夜に主将に着せる鎧がないからと、総指揮者の吉村がその金を借りに行つたり、また鎧も買ひに行つたりといふのは、ちよつと考へ難い。やはり鎧は、もう少し以前に吉村が大高屋に五両の手付け金を渡してツケで買ひ、軍資金の調達上、あとで久坂に中山忠光の鎧代として三十両借りて、その中から二十両、旗上げ前夜に覚之助に渡したといふことではないか……。しかし、那須から「養父への形見に」と小袖を託されたのも十三日の夜だとすれば、覚之助もなかなか忙しい。那須の場合は、土佐藩邸に覚之助を訪ねてくることは先づ不可能だから、これも覚之助のほうから会ひに行つたと考へるべきだらう。覚之助は、十三日の大和行幸の決定をきいて、気になる弟嘉助の動向をさぐりに薩藩邸へ行き、そこで那須にも会つたといふのは、一応ありさうなことだ。いくら薩藩の連中に遠慮があるからといつても、ふだんとは違ひ、これが今生の別れ——事実さうなつたのだが——になるかも知れぬときである。遠慮だの、気兼ねだのといつてゐる場合ではないだらう。ただ、覚之助が薩藩邸へ弟や那須に会ひに出掛けたとすると、ちよつと気色の悪い想ひのすることにぶつつかつただらう。それは、弟たちと一緒にゐる大石団蔵が「おれには別の意見がある」と、この義挙の参加を拒否してゐることだ。／大石がなぜ大和の義挙に加らなかつたのかは、わからない。しかしその理由は、いくらでも上げられるであらう。／大星が深い心は、原武森も知らぬ／祇園島原撞木町、傾城狂ひの／其中で、病なんぞで／死なれたら／忠か不忠か分りやせぬワイナ／これは間崎滄浪が京都にゐた頃、祇園で高杉晋作などと落ち合つたとき、酔つてつくつたものだといふが、或る意味で志士たちの心境をよくあらはしたものといへるだらう。浪士の集団蜂起が無意味なことは、真木和泉のやうな過激派のイデオローグもいつてゐることだし、事実、大和の義挙はほとんど無意味に近かつたわけだから、大石がそれを見こして参加を断つたのも、当然といへばいへる。ただ、大石は前年四月、那須や嘉助と一緒に土佐を脱走してきて以来、ただならぬ事態を体験し、文字通り死生苦楽をともにしながら一年数箇月、同じ屋根の下で暮らしてきたわけだ。その共通体験で結びついた仲間が、いま二対一で割れるといふのは、「忠か不忠か」といつたことよりも、それ自体が端的に不幸なものであつたであらう。とくに嘉助にとつては、香美郡野市村出身の大石は家も近いことであるし、この友に背かれることは一層やり切れぬ想ひがしたであらう。「維新土佐勤王史」は、嘉助と那須が大石に別れたあとのことを、次のやうに述べてゐる。／安岡は当時在京の大石弥太郎と同郷の好もありて、那須と共に訪ひ来り、左の和歌を書き、之を大石に与へて立ち去りしと云ふ。／かくばかり降りゆく世を梓弓／引き返さずばいかで止むべき／因に記す、大石団蔵、即ち高見某は、其の後、薩藩士の家へ養子となり、奈良原繁の従妹を娶り、近年まで、無事に生存し居たりしと、／念のために、「高知県人名事典」をひくと、嘉助たちと別れたあとの大石のことが、こんな風に出てゐる。／……（本稿一四八頁二重線部に同じ）／無事に明治まで生き残つた維新の志士たちは、新政府で出世してゐる例が多いが、それにしては大石団蔵の場合は大したことはなかつたやうだ。

※19

(1) この手紙は島村寿之助と連署になっているが、実際に筆をとったのは覚之助ではなかろうか。というのは前出、八月二十四日づけの文助宛ての手紙の前半は、これと同じようなことを同じような文体で書いてあるからだ。ただ、文助宛ての手紙の方が部分的にもう少し詳しく、具体的に述べたところがあり、たとえば、／十八日の早朝、七つ半（五時）頃、会津の屯営処とおぼしきところニテ小銃数挺の発声頻りニ致し候。時分違ヒのこと故、最初はよほど訝り候処、よく聞けバ発射の調子そろひ候ニつき、全くただの練兵なるべしと油断致し候。大石弥太郎、折節□屋へ参り寝ね候故、たがひニ打騒□ずしテ閨中より出でもセず候処、夜も明け、（周囲では）騒ぎ立て候へども、やはり先刻調練の砲声に相驚き候こととて、物笑ひ致し候ぐらゐの事。これまったく会津の合図のためニテ、これら思ひ合せば、かねてより支度致し候ハ必然のことなり。（以下略）／こういったくだりは、文助宛ての手紙にしかない。しかし、いずれにしろ京都にいる連中には、まだそれほどの危機感はない。政変によって危殆に瀕しているのは長州であり、長州の危機は全尊攘派の危機であるとは思っている。しかし、その危機が直接、自分たち自身に及んで来ようとはまだ考えていないのである。島村、安岡連署の武市に宛てた手紙は、何とか武市に京都に出てきて、この政局を周旋して貰いたいということを訴えているわけだが、彼等は武市自身がすでに身動きならない危険な状態に追い込まれていることを知らなかった。三条実美を護衛して長州に下った清岡半四郎が武市に宛てた九月十二日づけの手紙に、

(3) この手紙の宛名の「平六郎」なる人物は、じつは誰のことかわからない。ただ、いろいろの条件から考へ合せて、おそらくは武市瑞山であらうと思はれるだけである。いづれにしても政局の急変に、この二人が周章狼狽、なすところのない有様は如実にうかがへる。この政変で危機に陥入つたのは何よりも長州であり、長州の危機は全勤王党の危機である。したがつて長州を何とか援助しなければならないとあせるのだが、いくらあせつても彼等にはどうすることも出来ない。彼等が想ひつくことといへば何とかして武市に京都へ出てきて、この政局を周旋して貰ひたいといふことだけである。けだし彼等は、武市自身がこの時機に土佐でどういふ危殆に瀕してゐるかといふことを想ひめぐらすだけの余裕もない。しかし間もなく彼等は、いやおうなしにそのことを思ひ知らされることになる。九月十二日づけの清岡半四郎から武市にあてた手紙に、

※20

(1) 但し、そうなると覚之助も同日もしくはこれと前後した日に入牢ということになり、現に土佐の郷士史などでは覚之助の入牢を三月二十八日としたものもあるが、これは三月七日を入牢とした場合と同じくいろいろとツジツマが合わず、とくに文助の日記とは何箇所も齟齬するところが出てくるのである。／日記によると、

(2) 南会所は城の真南であるが、覚之助の入つた山田町獄は城下町の東端にあつて、瑞山のゐた南会所獄からは数町もへだたつてゐる。瑞山は山田町獄の様子も、牢番たちからの連絡をうけて、よく知つてはゐたが、やはり誤伝をきく可能性もすくなくないと考へるべきだらう。／それにしても、さきの覚之助入牢のときの手紙とくらべてみると、島村寿之助の入牢の場合は「誠に〳〵いかにもしんがいな事にて」とあるけれども、瑞山はそのことを大して口惜しがつてゐるやうにも残念がつてゐるやうにも思へない。むしろ、親しい身内がそばに来てくれたことを喜んでゐるやうにさへ感じられるほどである。一つには、これは前年の冬から病んでゐた瑞山の肉体が、ここへきて急速に衰弱してきたことを物語るものであらう。と同時に、ここには瑞山の性格の一端が覗いてゐるやうにも思はれる。つまり客観的に見て、島村寿之助と安岡覚之助とどちらが土佐勤王党にとつて大きな存在かといへば、これは問題なく**島村寿之助のはうが**大きい。寿之助は勤王党の参謀格であつたが、瑞山が入牢してからは、牢外にあつて瑞山の役割を代行してゐたといつていい。したがつて、寿之助の入牢は覚之助の場合にくらべて、勤王党にとつては遙かに大きな痛手なのである。にもかかはらず、覚之助の入牢は「目付のむりち、〳〵〳〵」であるが、寿之助が自分と同じ牢に入れられたことは「ただ〳〵ゆかしくおもひ候」である。身内に対するこの情愛の素直さは、「朝廷の事を申せば、直ぐに涙を流す天皇好き」の瑞山の真骨頂であり、ここに瑞山の人間としての美点と、政略家としての弱点とがあつたといへよう。／ところで、覚之助の

入牢を三月の七日としても、二十八日としても、じつはツジツマの合はぬことが一つある。

(3) 同右。但し　島村寿之助のはうが→島村寿之助のほうが

※21

(1) たかだか百年余りまえの、極く簡単なわかりきったような事柄が、もう少し踏み込んで正確なところを調べようとすると、藪の中に頭を突っこんだように何も彼もわからなくなってしまうことがある。安岡覚之助が慶応元年高知で入牢した、これは確かなことなのだが、何月何日、何処の牢に入ったかとなると、諸書それぞれに記述が違い、調べれば調べるほどわからなくなってくる。／高知には、城の直ぐ東南の南会所（帯屋町）獄と、廓中から堀一つへだてて東に寄った山田町獄とがある。一般に、南会所獄には上士が、山田町獄には下士や庶民が入れられるように聞いていたし、また寺石正路氏なども覚之助の入牢を山田町獄とハッキリしるしているので、私もそのように考えていた。しかるに横田達雄編註『武市瑞山獄中書簡――妻及び姉・妹あて』（昭和五十一年刊）によると、覚之助は閏五月七日、山本喜三之進と一所の獄、つまり帯屋町の南会所獄に入牢した、とある。じつはこれは、まえに「三月七日（推定）づけ」として引用した瑞山の妻冨子あての手紙からとったものだ。すなわち、／扨、けふは又、安岡格（覚）之助、揚り屋入りニ相成り、山本（喜三之進）と一所の獄へ入り申し候。／という。但し、横田氏はその日づけを三月七日でなく、閏五月七日として、その理由を「全書簡等と対比して『周五月』より他には考えられない。即ち（手紙の前文に出てくる）天候・病状・（後文に出てくる）煙草道具入れ、肴の味噌漬け等より」と述べている。この説明はあまりに簡略、かつ独断的に過ぎるように思われるかもしれないが、じつはこの手紙の日づけを三月七日と推定した『武市瑞山関係文書』（大正五年刊、昭和四十七年覆刻）編纂者にしても、推定の根拠が何であるかは全然述べておらず、おそらくかなり恣意的にきめられたものと考えられるのである。また横田氏は、『武市瑞山関係文書』が三月二十八日づけとしている瑞山の妻冨子あての手紙「けふハ前のおぢさん（島村寿之助）も揚り屋入りのよし、さきにたごる（咳する）御声を聞いて、ただ〳〵ゆかしくおもひ候……」も、三月ではなく五月二十八日であるとしている。これについて横田氏は、瑞山の書簡の原本をみたところ筆跡がカスれており、『関係文書』の編纂者は「五」を「三」と見誤ったものであろう、と他のところで述べている。私自身は瑞山の手紙の現物を見ていないので何とも言いようがないが、薄暗い獄内で筆も墨もロクにないままにしたためられた手紙の文字が読み誤られる可能性は大いにあろうと思われる。しかし、私が横田氏の説に首肯したくなるのは何よりも、覚之助の入牢を閏五月七日とすれば文助の日記と齟齬するところが全く無くなるからである。／従来、覚之助の入牢を大抵のものが慶応元年三月七日、もしくは三月二十八日としてあったが、おそらく前者は『武市瑞山関係文書』、また後者は『維新土佐勤王史』などによって覚之助と島村寿之助の入牢を同日と考えたためであろう。横田氏の説を受け入れれば、これらは誤りということになり、文助日記の記述とツジツマの合わぬところは一挙に氷解するわけだ。すでに何度も述べたように、文助の日記は極く粗略なものであり、また息子たちの政治運動にかかわる事柄については一切記述がない。しかし、ありもしなかったことをあったように書いた例はないし、四月十六日、二十一日、及び五月二日に、わざわざ覚之助が牢外にいたように偽ってみたところで何のトクにもならないことは明らかであろう。そんなことから私は、三月七日、あるいは三月二十八日の覚之助入牢をこれまでも疑ってはいた。ただ、『武市瑞山関係文書』をひっくりかえしてみると、獄中同志から川原塚茂太郎宛として、四月十一日づけの書簡の中に、次のような文句がある。

(2) **高知市の繁華街からハリマヤ橋**を渡つて北に進むと、右側が山田町である。その細い路地を入つた奥に「中江兆民住居跡」とした石碑があるが、それと向ひ合つて山田町牢獄の跡がある。無論、獄舎はいまは跡かたもなく、一般の民家や旅館がたてこんでゐるから、ここが藩政期の獄舎の敷地であつたことを知る人は、あまりゐない。兆民の家がここにあつたのは、父親の元助が下横目をつとめてゐた関係であらう。文久三年、平井収二郎、間崎哲馬、**弘瀬健太**の三人が切腹したとき、兆民は塀ごしにその有様を覗いたといふ話がのこつてゐる。兆民は慶応元年九月、藩命をうけて英学修業に長崎へ出張してゐるが、それまではここに住んでゐたのであら

う。しかし、下横目をやつてゐた兆民の父親は文久元年に亡くなつてゐるから、勤王党の獄のことは知らなかつたわけだ。十五歳で家督を相続した兆民は尊攘運動には興味を示さず、この獄舎の向ひ側の家に閉ぢこもつて、もつぱら読書にいそしんでゐたといふ。／それは**さておき**、安岡覚之助がこの山田町獄に入れられたのが、武市瑞山の手紙では三月七日、また一般に伝へられてゐるところでは三月二十八日、さらに文助の日記からは五月二日以降のことと判断せざるを得ないのは、どうしたことか？　私は、これに関しては、**文助の日記が一応最も**妥当なものかと思ふ。これまで何度も述べたやうに、文助の日記は息子たちの政治運動に関係のあることは一切記述を省いてゐるが、ありもしなかつたことをあつたやうに書いた例はない。それに四月十六日と二十一日、及び五月二日に、わざわざ覚之助が牢外にゐたやうに偽つてみたところで何の**タシ**にもならぬことは明らかだからである。その上で、瑞山の書簡集を読み直すと、先づ**三月七日づけ**で妻冨子あてに、「けふは又、安商覚之助、揚り屋入りニ相成り、山本と一所の獄へ入り申し候」といふのがあつて、その後も何度か、覚之助のことが出てをり、それを見ると、また瑞山のいつてゐることが必ずしも誤伝によるものとは思へなくなつてくる。そこで、瑞山の書簡も文助の日記も、どちらもが正しいものだとすれば、覚之助は三月七日に**揚屋**入りをした後、いつたん許されて山北村へ戻され、また類属預りになつたのであらうか。といふのは獄中の同志の間でかはされた書簡のなかに、たとへば**四月十一日づけ**で、次のやうなものが**あるからだ**。

(3)　同右。但し　高知市の繁華街からハリマヤ橋を→ハリマヤ橋を　弘瀬健太→広瀬健太　さておき→さてをき　文助の日記が一応最も→文助の日記は一応　タシ→利益　三月七日づけ→三月七日付け　揚屋→揚り屋　四月十一日づけ→四月十一日付け　あるからだ。→ある。

※22

(1)　そして、この「十三士」は、武市瑞山、島村寿之助、小畑孫次郎、同孫三郎、河野万寿弥、島本審次郎、檜垣清治、今橋権助、森田金三郎、山本喜三之進、安岡覚之助、吉永良吉、園村新作の十三人であると頭註に出ている。勿論、この書簡や註釈はそのまま信じるわけには行かないが、これら事件の容疑者たちが何度紀問をうけても絶対に罪状を否認しつづけているため、藩庁も持てあまして、いつたん彼等を釈放するといつた噂は流れたらしい。これに対して、瑞山から北獄同囚宛に「四月中旬」のものとして、次のような書簡もある。／今日ハ隣ト応接イタシ候故、大イニ御無沙汰仕リ候。実ニ御賢察ノ通リ、今十三士ヲ解キ、且又、児組（岡田以蔵など、拷問にあつて自白した四人を指す）迄所置スルヿ、更ニワカラズ。若シヤ誠ナレバ甚ダ賀スベキ事ノ様ナレド、実ハ正シカラザル也。信ズルニ足ラヌヿト存ジ候。……／まえの無名獄中同志からの書簡にくらべて、この瑞山の手紙は遥かに現実感があり、私などには本物のように思われる。この手紙、北獄同囚宛となつているが、じつは山田町獄内の河野万寿弥（敏謙）に宛てたものらしい。初めの方に「実ニ御賢察ノ通リ」とあるところを見ると、どうやら河野から瑞山に、近頃十三士釈放という怪しげな噂が流れているが、これについてどう思うかといった問い合せがあつて、この手紙はそれに答えたもののようだ。そして瑞山も言うとおり、この噂は「信ズルニ足ラヌヿ」に違いない。／しかし何にしても、当時、罪状否認をつづけるグループは「十三士」と呼ばれて、それが通り名のようになつており、そのなかに島村寿之助や安岡覚之助も入つていたとなると、やはり覚之助は四月十一日、もしくは四月中旬の時点で獄内にいたのかと思いたくなる。しかも文助の日記にあるように、覚之助が山北村で時折、島村覚之丞方の講釈会に出かけて行つたりしているものとすれば、或いは容疑者解放の噂は単なるデマではなく、そのなかで何人かは一時仮釈放にでもなつていたのかという気もする。実際、佐々木高行の回旧談などを読むと、藩庁の勤王党弾圧は一般に甚だ不評であり、揚り屋は南会所、山田町とも勤王党関係の被疑者で満員で、他の罪人を収容する余地がなく、獄舎の増築をしなければならぬ騒ぎである。したがつて一部の容疑の薄弱な者を牢から出して類属預りに戻すといった措置も、まつたく有り得ないとも言えないだろう。だが、もしそのようなことが実際に行われたものとすれば、瑞山の厖大な獄中書簡の中にそれに触れたものが必ず何通かあるはずだが、そのようなものは一通もない。してみれば、「十三士」全員の解放は無論のこと、一部の仮釈放なども全然行われなかつたと考えるべきだろう。但し、覚之助が四月中旬頃、獄外にいたことを示すものとして、四月

二十三日づけで瑞山が妻冨子にあてた手紙の中に次のような文句がある。

(2) この「十三士」といふのは、瑞山、島村寿之助、小畑孫次郎、同孫三郎、河野万寿弥、島本審次郎、檜垣清治、今橋権助、森田金三郎、山本喜三之進、安岡覚之助、吉永良吉、園村新作の十三人であるが、これらの容疑者は何度糺問をうけても絶対に罪状を否認しつづけてゐるために、藩庁としても彼等をいつまでも牢内に**とめておく**わけにも行かず、近く釈放するといふ噂が流れたのであらう。これに対して瑞山は、獄内の同志にあてて、／今、十三士ヲ解キ、且又、児組（岡田以蔵など、拷問にあつて自白した四人を指す）迄所置スル丁、更ニワカラズ。若シヤ誠ナレバ甚ダ賀スベキ事ノ様ナレド、実ハ正シカラザル也。信ズルニ足ヌト存ジ候。／と、噂に踊らされて無闇な期待を抱かぬやういましめてゐる。たしかに噂が岡田など自白した組をふくめて全員釈放といふことであれば、これは根も葉もない流言に過ぎないと考へるべきであらうが、藩庁が瑞山以下、逮捕した勤王党の**処置**に苦慮してゐたことは事実であつた。第一、南会所にしろ山田町にしろ、獄舎はそんなに広くはないし、山田町では**揚屋**の増築をおこなつたが、勤王党の容疑者をいつまでも**置いておく**と、他の者は入れる余地がないのである。さういつたことから、覚之助のやうに容疑の根拠の薄弱な者は、いつたんは仮釈放のやうなものになつたと考へても、それほど無理な想像ではないだらう。ただ、それにしては、瑞山が**厖大**な獄中書簡のなかで一度もそれに触れてをらず、したがつて覚之助の他にも釈放された者がゐるかどうかもわからないのが、をかしいといへばをかしい。多少それらしいことを想はせるものは一通だけ、**四月二十三日づけ**で妻冨子にあてたもののなかに、次のやうな文句が**あることだ**。

(3) 同右。但し　とめておく→とめてをく　処置→所置　揚屋→揚り屋　置いておく→置いてをく　厖大→彪大　四月二十三日づけ→四月二十三日付け　あることだ。→ある。

※23

(1) すでに述べたように、横田氏は『武市瑞山関係文書』が三月七日と推定している瑞山の妻冨子あて書簡の日づけを閏五月七日と訂正し、その書簡の文面から安岡覚之助が同日、帯屋町の南会所獄に入牢したものと判断している。そして私自身も、いまはこれが最も妥当なものであろうと考える。／覚之助は、これまでにも何度か糺問を受けているはずであるが、文助日記はそれについては何もしるさず、こんど初めて「雨。覚之助出府」と書きとどめているのは、いよいよ入牢が近づいたことを察知したためでもあろうか。類属預りの者は、外出のときには家から獄卒がついて行く。雨の中を獄卒に連れられて糺問所に引き立てられて行く息子の後姿を見送る文助の胸中は、沈痛なものがあったであろう。しかし、四月二十二日の糺問は一日だけで、覚之助はその日のうちにも帰宅を許されたはずである。ただし文助の日記は、四月二十一日のあと五月一日まで中断され、五月二日に再開された日記には、またもや「雨。覚之助出府」とあり、翌五月三日、単に「曇」としるした二字だけで天保五年以来、三十一年間にわたつた日記の全体がおわつているわけだ。／もし、文助の日記だけから考えれば、七日という日附のみで月のわからない瑞山の手紙は、閏五月でなく、五月七日づけと見做してもいいわけだ。それを横田氏があえて「『閏五月』より他には考えられない」としたのは、瑞山が入牢以来ある時機には連日、ときには一日に何通も、家族にあてて書きつづけてきた百五十通ほどの書簡の全体を一連の長い獄中記として捉え、その文脈のなかで日附を追つて文体や用語が変つてくる有様や、また下痢をともなう発熱で、体調を崩していた瑞山の病状、食物の嗜好、その時どきの天候・気象など、文面から汲み取られるあらゆるものを勘案した上でのことである。無論、日附の点で疑問のある書簡は他にも沢山あり、その大半は私などの判断の及び兼ねるものなのだが、全体として横田氏の推理や観察には共感させられるところが多かった。なかでも、閏五月七日づけの書簡の頭註に次のように述べたものなど、まさにナルホドという気がした。「安岡覚之助。彼れの入獄月日については、管見乍ら、諸書悉く錯誤あるものの如し。（武市瑞山関係）文書の全資料を通じて、彼れの『在獄』を示す物が全く見当らない事は、本書簡が『閏五月』のものなる事を示す一証左ともなる筈。」／じつは私も、瑞山の手紙のなかに獄中の覚之助について触れたものが一通もないのはなぜだろうか、と思っていた。そのためもあって私は、長い間、覚之助が瑞山と同じ南会所獄にいたとは知らず、南会所から数町へだたった山田町獄に入れられていたものとばかり思い込んでいた

ぐらいだ。しかし、覚之助の入牢が閏五月七日とすれば、その四日後の十一日には急遽、瑞山自身が切腹申し付けられるのであるから、覚之助がどうしているかなど触れる余裕もないはずである。／実際、瑞山以下、勤王党容疑者一同への断罪は、突然行われた模様である。／すでに述べたように、この慶応元年正月早々、

(2) 類属預りの者には、家から獄卒がついて行く。前にも述べたやうに、四月二十一日のあと五月一日まで文助の日記は中断されるが、雨の中を獄卒に監視されながら糺問所に引き立てられて行く息子の姿を見送つたあとでは、文助は日記を書く気にもなれなかつたのであらう。そして、五月二日になつて再開された日記には、ふたたび「雨。覚之助出府」とあつて、あくる五月三日、単に「曇り」としるしただけの一行で、日記はまつたく終つてゐるわけだ。あへて小説風の感情移入をおこなふまでもないことだが、この日、文助は曇天の空を仰ぎながら、前日出府したまま帰つてこない息子を案じて、暗然たる想ひで**あつたはずである**。／しかし、このやうに覚之助が入牢したり仮釈放になつたりを繰り返してゐたのだとすれば、それは藩庁がいかに時勢の圧力に戸惑はされてゐたかを語るものであらう。**すでに述べたやうに**、この新年早々、

(3) 同右。但し　あつたはずである。→あつたであらう。　すでに述べたやうに、→すでに述べたやうに

※24

(1) おそらくその直後に書かれたものと思われる、獄中から実父文助と実母にあてた手紙が、一通だけ残っている。薄暗い獄舎のなかで、あわただしくしたためられたものに違いないが、墨の色がいくぶん薄く、字がいつもよりは大きめであるという他は、不断の手紙と変ったところはない。差し入れを許されたのか、用紙もちゃんとした巻き紙であり、筆も箒の穂や楊子を噛みくだいたりしたものではなく、普通の毛筆である。／公法厳なれバ、その後鳥信不通の処、幸ひ宜しき便アリ、一筆指し出し申し候。酷寒ニ候へども、尊大人様、母上様、御機嫌よく遊ばされ、次ニ子供ニいたるまで皆々息災なる由、安心つかまつり候。児ことモ、投獄以来いたつテ息災ニテ、九月ニ風邪ヲ一度ひきたるぐらゐのこと故、御気遣ひなく、時節御待ち遊ばさるべく、もとより兼テ覚悟の事なれども、嘸さぞ御痛心さるるべしと日夜これのみ想像、悲痛に堪へず。／しかのみならず、先達て義母様の逝去、実ニ血涙潜々、魂神も消え入るばかり、畢境、児の不孝のいたすところかと存じ候へども、いまさら詮ナキこと、或る有志ノ人の歌に、「国ノ為、世ノ為ナレバイカンセン、親ヲ思ハヌ人シナケレド」と申し候歌など思ヒヤリ、いささか愁苦ヲ慰メ候。何ヲ申シテモ時節到来、トニカク時来レバ**冤モ**晴レ申スベク、御気長に御セ話のほど、ひとへニ希ひ奉る。何分あまり御心配これありテハ、御身の御為ニモ宜しからぬこと故、なるだけ御気を延べ、御楽しみ等もなされ、御養生専一と存じ奉り候。／子供ハ（謹）慎ノこと故、外デノ稽古ハ出来ヌ故、何とぞ書物ヲ精ヲ出スヤウ御励マシ、御セ話なされたく候。／年モカワレバ又々幸ヒモ到ルベク、何分とも御気長に御セ話のほど、伏シテ希ひ奉り候。児モ外より思フ程にモなく、存外獄舎ニ慣レ、殊ニ暑とハ違ヒ、寒ハ暮しやすく候。必ズ〳〵児にハ御心置ナク、子供ヲ御楽ミガテラ御セ話なさるべく。なにかと申し上げたく候へども、長けれバ擱筆。／もとより極密のこと故、婦人などニハ御用捨。稀ニ覧て思はず泣血、意を尽しがたく、返ス〳〵も御気長く御保養の上、時節到来、御待ちなさるべく候。／九月廿七日迂児／尊大人様／二白、児、懦気ニテ帖面など不分明の処モこれあるべく、何分御セ話やくべく、両家のこと故、嘸さぞ御繁忙と察し奉り候。／児の机ノ引出ニ金包アリ、御詮義下さるべく、具足櫃、革籠ニモアリ。／尚以て母公様、随分とも御慰、とにかく煩らはぬやう肝要〳〵、命サヘアレバ、又時節モ来ルアリ、禍福ハ常無き事。

(2) 同右。但し　冤モ→冤モ

(3) 獄中から、実父文助と実母にあてた手紙が一通だけ残つてゐるが、なにぶん薄暗い獄舎のなかで、あわただしくしたためたからでもあらう、粗末な紙に走り書きにした毛筆の字は、私には殆んど判読不能で、日附けもわからない。ただ、／先達つて義母様御逝去、実に血涙潜し、魂神も消え入りて……壱児不幸のところ致し……／といふやうな文句から、これは慶応元年秋のことかと察しがつくだけだ。しかし、この読みとり難い文面からでも、どうやら覚之助の家郷をおもふ切々たる心情だけは汲みとることが出来る。／……児らも、投獄以来いたつて息災、九月ニ一度風を引きたる

位ニテいまは獄舎にも馴れ、暑さ寒さも日を追つて暮らし易く相成り候へば、必ず御心置き無きやう……、御尊大人様、母上様にはさぞ御気落しのことかと存じ候へども、何ぶん余リ御心配有リテハ御身ニモ宜しからず、年も変れば又、幸も到来する哉も知れぬ故、この上は何卒御気長くもたれ、……遺る子供ら三人の養育につき、満喜（覚之助妻）の手にあまることも多々有るべく、お世話宜しく願ひ上げ候、……子供の躾、殊に書見ハ他ノ稽古ニモ将来必要なれバ、何とぞ書物に精出すやうお世話下され度く、なほ児机の引出しに金包アリ、御詮ぎ下さるやう、また具足櫃と草籠にもアリ、何ぶんにも宜しくお頼み申し上げ候……／大概のところ、見当をつけて読むと以上の如くである。

※25

(1) しかし、これは平尾氏が叙述を簡略にするため省筆されたものであって、当時の小笠原唯八の日記によると、たしかに小笠原は三月二十七日に京都に帰るため一旦、市ヶ谷の尾州邸を出発しているのである。但し、同日は品川宿で泊り、二十九日まで三日間、同宿に滞留して、翌三十日には また尾州邸に戻ってきている。日記はその翌日から暫く記述がなく、二週間後の四月十四日、／一、今日、江戸ヲ発ス。／という記事があり、同月十九日に京都に着いているのだが、平尾氏の『土佐百年史話』は、その間のことを全部省略して単に江戸情況の「視察を遂げて」となっているわけだ。／ところで、小笠原の帰京は何でそのように尾州邸を出たり入ったり、品川宿に何日も泊ったりして手間どったのか。谷干城の『東征私記』によれば、最初は江藤新平一人が帰京して三条に江戸の状況を報告し、小笠原はしばらく江戸に残ることになっていたのが、急に小笠原も一緒に京都に戻ることになったのだとある。しかし、なぜそういうことになったのかは分らない。それで私は、江藤と小笠原の間に何か角逐があったのではないかと想像した。いや、これは何も個人的な功名争いのことではない。この二人が江戸の実情調査に派遣されたのは、東海、東山、両軍の間に確執があるという噂の実相をさぐるのが、大きな目的の一つであったが、それは小笠原が板垣や谷などと会って話をきいただけで、たちまち了解がついた。ただ、そうはいっても、江藤一人を京都にやって三条にその報告をさせるのは、小笠原としては何となく気がかりなものを感じたのではないか？　とくに小笠原にとって板垣は青少年期からの盟友である。三条が家来の黒岩治部之助を通じて板垣の悪い噂を吹きこまれているものとすれば、三条への報告はやはり小笠原自身がしておきたかったであろう。それに江藤は肥前藩士であるが、自藩が薩長は勿論、土佐にも一歩遅れをとっているのを、この際少しでも取り戻そうとして、板垣を貶しめるような報告をするかもしれない、と小笠原はそんなことも気がかりであったのではないか。／しかし、これは私の考え過ごしであった。だいたい江藤新平については、何となく梟雄といったイメージがあるが、これは佐賀の乱の影響であろう。少くとも小笠原にとって江藤は梟雄などではなく、知り合った早々から意気投合したように思われる。小笠原が江戸に入った三月二十二日の日記には、／一、今日、内藤新宿ニ行キ、又尾州邸ニ行キ、乾退助ニ逢フ。夜、品川宿ニ帰ル。江藤新平来ル。売女ヲ呼プモ入衾ヲ許サズ。／とある。何でわざわざ呼んだ売女の「入衾ヲ許サズ」であったのかは知らない。しかし、おそらく小笠原は江藤と談論風発して、宿場女郎と「入衾」するどころではなかったのであろう。／翌、二十三日には小笠原は江藤と同伴して、四谷新宿に行き、さらに板橋の東山道軍本営に行って、その晩はそこで泊っている。翌々、二十五日、／一、今日、江藤新平ニ別レル。吾、尾州邸ニ移ル。江藤、京ニ行ク。／とある。『東征私記』に、「先づ江藤一人（京都へ）帰る筈の処」とあるのは、このことであろう。しかし、江藤はこの日はまだ京都に向ってはいない。そして翌々、三月二十七日、小笠原は尾州邸を出て京都に向うのであるが、品川宿でとまる。ところで、その品川の旅籠岩槻で江藤新平、島団右衛門など、肥前藩の面々と出会わせ、それから彼等と一緒に延々と三十日まで品川で過ごすことになるのである。岩槻は品川では土蔵相模に次ぐ大きな宿屋で、娼婦（飯盛女）も大勢かかえているが、江藤・小笠原の一行はここで流連荒亡を重ねていたのではない。京都へ行った西郷吉之助の帰りを待ちうけていたのである。／西郷は、去る三月十三、十四の両日、江戸で勝海舟と会い、徳川慶喜の処遇や江戸開城のことをきめ、東海、東山両軍参謀に三月十五日の江戸城総攻撃の中止を伝えたのち、翌十五日に京都に向った。二十日、京都に着き、勝との案件を朝議にかけて了解をとると、翌々二十二日、力士

陣幕のかつぐ駕籠で京都を出立、大兵肥満の西郷は普通の駕籠では間に合わなかったのである。二十五日、駿府によって大総督宮に勝案の朝裁を復命、二十七日に駿府を立っている。／普通、駿府から品川までは一泊二日の行程で翌日には着く。それで小笠原たちは、二十八日いっぱい品川で西郷の帰りを待っていたが、ついに西郷はあらわれなかった。じつはその日、西郷は横浜で英国公使パークスに会っていたのである。／その日のパークスとの会見について、西郷は大久保利通あての書簡（四月五日づけ）の中でかなり詳しく述べている。それによると、西郷が駿府に到着した日に、横浜のアーネスト・サトーから、「パークス公使が貴殿と会いたがっているから、是非立ち寄られたい」旨の手紙が届いた。それを見て、これは勝の仕業だな、と西郷は思った。／……定めて勝抔よりも外国人へ手を入れ、此の節の御処置（将軍慶喜の処遇その他）に口を続かせ候儀と相心得候故、是は早く解き付け置き申さず候わでは、事の差し障りに相成るべき候と相考え候故、委敷談判に及び、決してこれに携わらざるものに論じ付け置き申し候間、御安心下さるべく……／パークス公使、つまり英国は薩長の味方であるとは限らなかった。自国の利益のためには、薩長も支援したが幕府を助けることもあった。また幕仏間の離反をはかって、両者の間に割り込んだりもした。一方、幕府側もフランスばかりを頼ろうとはせず、何かあれば英国にも働きかけていた。そのことは、西郷など薩長側も承知しており、こんども駿府でサトーからの手紙を見たとたんに、西郷は勝海舟の顔を憶い出し、ここで英国に這入りこまれては面倒なことになると、パークスと「委敷談判に及び」決して口出しはしないでくれと申し入れたわけだ。このときパークスと西郷の間で通訳をしたのは、サトーであろう。サトーは、会談のいきさつや模様を次のように記している。／……勝はまたハリー・パークス卿に、天皇の政府に対する卿の勢力を利用して、こうした災い（内乱の戦火など）を未然に防いでもらいたいと頼み、長官も再三この件で尽力した。特に、西郷が四月（三月？）二十八日にパークス卿を横浜にたずねた時には、卿は西郷に向って、慶喜とその一派に対して苛酷な処分、特に体刑をもって望むならば、ヨーロッパ諸国の輿論はその非を鳴らして、新政府の評判を傷つけることになろうと警告した。西郷は、前将軍の一命を要求するようなことはあるまいし、慶喜をそそのかして京都へ軍を進めさせた連中にも、同様に寛大な処置がとられると思うと語った。……（アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』坂田精一訳）／西郷がここでパークスに語ったこと――将軍や幕府側家臣に寛大な処置をとるという――は、すでに三月十三、十四両日の会談で勝に約束したことであるから、あらためてパークスにこのようなことを頼む必要はなかったわけだ。また勝自身、西郷の人物の大きさや、これと見込んだ人間に対する信頼の念の深さに感銘をうけたことを、何度か語って記録にのこしてもいる。したがってこの際、西郷との会談を了えた直後に、勝がわざわざパークスに手を廻して「此の節の御処置」についての容喙を依頼したとは、腑に落ちない気もするが、勝にしてみれば西郷はやはり敵の参謀（事実上の総司令官）であり、強力な第三者からの圧力をかけておかなければ安心出来なかったのであろうか。それに西郷も、パークスから召びつけられた手紙を見て、裏で勝が動いているものと直感的に受けとっているのであるから、決して手放しに勝を信用していたわけはないのだろう。／もう一度、小笠原の日記に戻ると、／三月廿九日　雨／仲三郎ヲ神奈川ニ遣ス／一、（板垣）退助、佐久馬、来ル。／一、西郷吉之助、来ル。／一、復夕暫時、江戸ニ止マルノ議ニ決ス。／とある。神奈川に使いを出したのは、おそらく西郷の様子を見に行かせたのであろうか。また板垣がやって来たのは、西郷と会うためにちがいない。江藤新平の名前はないが、同じ旅籠に泊っていたものとすれば、ここに居合せないわけはないだろう。やっと姿をあらわした西郷が、ここでどんな話をしたか、昨日のパークスとの会見の模様も出たであろうが、やはり江戸開城に向けて今後の江戸の情勢や、慶喜を中心とした旧幕臣たちの動向が主要な題目になったものと思われる。それで、江藤、小笠原、ともども京都へ復命に戻るのをしばらく見合せたのであろう。そして翌三十日、小笠原は土佐藩の駐留する尾州邸に戻り、四月十一日の江戸の城受け取りなどを見届けたうえで、同月十四日に江藤と一緒に京都に帰ったわけだ。／小笠原と江藤が意気投合したらしいことは、この項の初めの方に述べたとおりだ。小笠原は「気象倜儻ニシテ大志アリ」といわれ、山内容堂に心酔していた頃には、野根山の勤王派郷士二十三人を裁判ヌキで一ぺんに斬刑にしたりもしたが、慶応年間に入ってから板垣と並んで勤王派の急先鋒になった。直情径行だが気

風は好く、そのへんが江藤のような男とはかえってウマが合ったのだろう。その後、小笠原は会津攻城の初日に次弟の謙吉とともに戦死するのだが、江藤は「生前からの約束だから」といって父親の小笠原弥八郎にあてて刀を一本贈っているし、末弟彦也のことまで気にかけて、細やかな心遣いを示している。／ところで、江藤、小笠原の二人の江戸調査報告は、これまでの朝議を一変させるほど、重要なものであったらしい。

(2) いづれにしても小笠原は、三月下旬に江戸市ヶ谷の尾州邸にゐたことにはなるから、たいした矛盾はないが、覚之助は自分の手紙を託するつもりで「本日、小笠原唯八殿、帰京ニつき」といってゐるのだから、少くとも小笠原はいつたんは三月二十七日に江戸をたつ予定であつたと考へていいだらう。それが四月十四日まで延期されたとすれば、その間に何があつたのだらう。覚之助の次の手紙は四月二十二日づけで、ほとんど一月ちかく間があいてゐるが、小笠原のことについては何も触れてゐないので、まつたくわからない。／谷の『東征私記』によれば、最初は江藤一人が帰つて三条に江戸の状況を報告し、小笠原はしばらく江戸に残ることになつてゐたのが、急に小笠原も一緒に京都に帰ることになつたのだといふ。これも、なぜさういふことになつたのかは、わからない。しかし想像をたくましくしていへば、江藤と小笠原の間にも何か角逐があつたのではないか。それで、そもそもの予定では、小笠原が先きに帰京して三条に報告し、江藤は江戸で調査をつづけることになつてゐたのが、小笠原は江藤一人を江戸に残すことが気になつて、自分も帰京を延期した、これが三月二十七日だとする。そして四月十四日、こんどは逆に江藤が一人で京都へ帰るといふと、小笠原はまた江藤が三条のまへでどんなことをしやべるかが心配になつて、自分も急遽江藤と同行することになつた、こんな風には考へられないものだらうか。／但し、小笠原唯八は「気象倜儻ニシテ大志アリ」といはれた男で、山内容堂に心酔してゐた頃には、野根山にこもつた勤王派の郷士二十三人を一ぺんに斬首刑にするなど、剛毅果断で知られてゐる。慶応年間に転向して、板垣退助につづいて討幕派の急先鋒になつたが、要するにまはりに気兼ねして右顧左眄するやうな性格ではない。そんな小笠原が、いちいち江藤を気にして、その跡を追ひかける真似などするはずがないかもしれない。さうだとすれば、私の想像はまるきり見当違ひであらう。けれども、この二人の江戸の調査報告は、これまでの朝議を一変させるほど、重要なものであつた。

※26

(1) 六月十三日に江戸を出発した覚之助は、何日に白河に到着したか、その日附は不明であるが、六月二十四日の棚倉攻略戦には参戦しており、その模様を六月二十六日づけの手紙で、次のように伝えている。／奥州棚倉より一翰謹啓、（中略）当月廿四未明に白河ヲ発シ、当棚倉へ相向ひ申し候。これは薩、長、大垣、忍、黒羽、本藩、六藩の兵なり。／本藩は、胡蝶隊、行宗進之助隊、笠原儀兵衛隊、谷神兵衛隊、二川元助隊、山田喜久馬隊、二番隊＝差引（引率）□龍太郎、六番隊＝差引小野尾馬、断金隊（甲州人数）＝差引美正貫一郎、砲隊隊長北村長兵衛など、分□、棚倉エ向フ。／白河より二里参り、関といふ山峯ヨリ賊の大砲頻りニ打つ。距間、遠ケレバ決して近くエ参らず。小銃は打ち申さず候。それより郷渡と申す村落に賊少し居り、少し打ち取る。皆、人足体のものなり。□□金山といふ処、これは兼テより賊の巣穴と致し候ところニテ、砲台など相構へ、頻りに大小砲を発射いたし候なれども、屈せずして進撃。一番に進ム者ハ薩、長まじり六、七人、本藩人モアリ。ついで御国六番隊進ム。それより二川隊、あひついで蝴蝶隊、三番隊など相進ミ、暫時にして賊を追ひ散らし、大砲、四条砲壱挺、その他、牡丹大砲、小銃モ大分これあり候へども、□□中なれバ封ヲ付け置き、そのまニ致し、四条砲ばかり□□。今日□□□余につもりなり。／それより棚倉へかかり候ところ、賊は一戦も致さず、城ヲ放火致し逃走。城外エモ火ヲ放チ候へども、余計は焼け申さず候。御国の本営は矢張り城中の焼残りのよろしきところにこれあり、兵隊は町家などに居り申し候。……／このように棚倉がアッサリ陥落してしまったのは、棚倉藩の主力が平潟の官軍上陸地点の防衛にまわってガラ空きになっていたからだというのは、その通りだろう。しかし元来、棚倉藩には官軍と戦う意志も兵力も不足していたようだ。大山柏『戊辰役戦史』は「（棚倉藩が）それほど官軍の来攻が恐ろしいのなら、なぜ早くに手を打たなかったのか、方法はいくらでもあった筈だ。第一は降伏帰順。それができないのなら全部退避して空城にする。この決断もできず、防御

の不可能を知りながら、徒らに烏合の兵を集めて抗戦するという、最も愚かな手段をとった」といっている。／棚倉は、藩兵だけでなく一般民衆も、官軍に対して抵抗するところがなかったらしい。そのことは覚之助の手紙の、「兵隊は町家などに居り申し候」という文句にも見えている。土佐藩兵が今市に四十日ほども滞陣していた間、連日の雨に悩まされながら、ずっと天幕でくらして民家には立ち入ろうともしなかったのは、それだけ今市の一般民衆が官軍に対して敵意を持ち、会幕軍に同情をよせていたということだろう。しかし、棚倉では総員八百名ほどの官軍兵士が民家に入りこんで泊り、しかも町の人たちにかなりの悪事も働いたらしい。これについて覚之助は、とくに薩、長両藩兵の暴状が甚しいといって、次のように憤慨している。／……昨日などハ諸藩兵とも、（棚倉藩）家中などより近村あるひは町家エ預け置き候荷物を分捕り致し、□類□類など、□□中ニは、それ□□などニいたりテハ家中のものニ□□□人など逃ゲ走り、□□□エ這入り、とかく□□ヲ取り候やからも鮮からず。なかなか他藩、薩、長と雖もこのへんまで軍令行き届き申さず、実ニ愁ふべきの至りなり。賊ノミヲ払ヒ、三民ヲ安堵いたさしむるが官軍の官軍たる所以なるに、却テ三民の物ヲ窃ミ取るやうの事にいたり、官軍の名を汚すのみならず、斯く成り行き候はば官軍を厭ヒ賊ニ荷担スル者多ク相成るべく、とにかく天下平定ニハ至り難くと、頻りニこのへん御国ヨリ論ヲ立て申すことニテ御座候。……／虫食いの部分が多く、読みとり難いところがあるが、覚之助の言わんとしていることの大要は理解できる。但し、棚倉の土地の人の書き遺したものを読むと、官軍の暴虐狼藉振りのすさまじさは、覚之助の手紙にある程度のようなことではなかったらしい。／……この近辺の庭鳥ハ、官軍様がた右へ行き、鉄砲ニテ見付け次第ニうち留メ、手込メニころし召しあがり、この辺庭鳥一節ハ一疋もナシ。二月、三月程もたね切りニ相成り申候。それでもあちらこちらニ少々相見へ申候。そのほか牛など、戌など、ねこなど、うちころして、これも身の養定（生）ニ召しあがり申候。牛壱疋、直（値）段金三十両位、戌などハ手ぐミに打ころし、あら方種切ニ相成候。依之処たまニハ人ヲく（食）ろふ事もあり卜言フ。／其をそろしき事ハかぎりなく、このとき馬場不動院様、阿部（棚倉藩主）様ニすけだちいたし候故、官軍勢ニ庭てき（？）ニ致され、別当座敷ニテ首をと（落）され、新町前堀ニ入れ流し、門屋弁助殿のまへの橋の上に右の不動院のくびをさらし置き候。その首、悋しやけどのニ至る迄、土州様へ願ひ右の首をもらひニ、それへ□ひ□いたし、ようやく首、別当宿元へ引き取り、それよりほふむり申候。格別のツミとがもなし、ただ阿部様へ付いテのみの事ニ首をと（落）され申候。／右は棚倉鉄砲町の町人木谷富蔵の書き遺したもの。富蔵の家業は研師で、町役人をつとめたという。覚之助の手紙には、棚倉藩兵は落城退却のとき、城と城下町の民家へ放火したが、「余計は焼け申さず候」とある。しかし富蔵の手記には「御屋敷ハ申すに及ばず、古町、鉄砲町、下町、残らず焼失仕候」とあり、富蔵自身の家には鉄砲玉が飛んできて、店や土蔵も焼け落ちた模様である。いずれにせよ、町民は家を焼かれ、農民は食糧を徴発されたうえに、鶏や、牛や、犬、猫まで、あらかた種切れになるほど殺され、「召しあがられ」てしまったのではたまったものではなかろう。官軍といわず藩兵といわず、戦場となった土地に住む者にとって、軍隊はすべて「をそろしき事ハかぎりな」いものという他はない。／「格別ツミとがもなし」に、ただ藩主「阿部様ニすけだち致し」ただけで斬首のうえ曝された「馬場不動院様」のことは、郷士野中八郎の日記にも出てくる。それによると、馬場不動院の父子は、配下の者とともに棚倉勢に従軍して関山口へ行ったが、落城後は自宅にひきこもっていたところ、六月二十五日、黒羽藩に召し捕られた。同二十八日、黒羽藩は他へ転進し、あとを土佐藩が引きついだが、土佐藩はこの父子を吟味のうえ翌日釈放した。しかるに七月十四日の正午、土佐藩士を名乗る侍二人が馬場不動院宅にやってきたので、この家の主人が挨拶に出たところ、ただちに斬首されて、その首級を何処かへ持ち去られた。その後、この首は新町の鍵屋忠五郎方の筋向いの堀橋の上に、泥まみれになって曝されていた、というのである。／棚倉藩に加勢し配下の者をつれて従軍したというのは、全く罪咎がないとは言えないかもしれない。しかし、いったん取り調べた上で釈放した者を、後日いきなり押し掛けてその場で斬首したのは無法であり、何やら後世中国に進出した皇軍のやり口に似ているようでもある。これについて、覚之助は何も知らなかったのか全然触れていない。もっとも、前の手紙は六月二十六日づけ、次のは七月三日づけで、棚倉からの手紙はこの二通だけだから、七月十四日に

起った右の事件に触れていないのは当然だろう。実際、覚之助はこの頃から、以前に増して軍務に忙しくなった模様で、家郷にあてた手紙は八月十八日に二本松から出したものが一本あるきりだ。それにしても、七月三日づけの手紙はいかにものんきな調子でこんなことを述べている。／此間、御飛脚、未ダ白河ニ留り候由ニつき、追啓仕り候。当方は先づ格別の事は御座なく候。過日は塙と申すところエ、二番隊、民心取り締りのためニしばらく参り居り、昨日当地エ帰り申し候。／このへん、民心大いに土州ニ帰し、（私どもを）領主の如くに思ヒ、いろいろ訴へごとを申し出で、却つて困り入り申し候。当藩家中ヨリ近村の民家などエ預け候品物おびただしく、分捕り申したる衣類、夜具等、結構の品これあり。武器ニハ余りよろしきものは得取り申さず候へども、薩、長、最モ巧者ニ取り申スニつき、定めテよろしきものもこれあるべく、夜具など実ニ結構、生れて初めて絹のふとんニテ寝申し候。衣類もたくさん。決して如何ほど寒気強きところといへども凍える気づかひは御座なく候。（略）／当所の分捕りは、未だ調べはつき申さず、大砲などおびただしく多く、大牡丹砲ニテ、なかに四条砲五挺、内壱挺ハそのまま打ち申し、その他の四挺は鋳たままなり。具足なども余程これあり候へども、本山の搗臼、何とも相成り申さず候。／城を乗つ取り候へバ、随分自由ハよろしきものなり。何ニテも入用のものととのひ、すでにこの状紙なども沢山にあり、右故、大筆相認め申し候。先づは右ばかり申し上げたく、匆々擱筆。／**なるほど**これまでの覚之助の手紙は、幅の狭い巻き紙や、半紙一枚に細かい字でぎっしり書きこんだものばかりであったのに、これはキラびきか何か立派な紙質の巻き紙に、大きな字でのびのびと書いてある。巻き紙ぐらいはどうということもないが、疎開してあった棚倉藩家中の衣類、夜具類などの生活用品を、そっくり官軍が分捕ってしまったというのは、武士道からみれば世帯染みたところがありはしないか。もっとも、「生れて初めて絹のふとんニテ寝申し候」といっているあたりは、素直で頬笑ましくもある。しかし、これでは兵隊たちが、それぞれ分捕り品を血眼になって取り合っていたとしても、あまり咎め立ても出来ないではないか。勿論、一般民家の持ち物に手を出すのは絶対に許されないことだが……。**そういえば**、覚之助の六月二十六日づけの手紙の欄外には、／近日、平潟との通路ひらケ候へバ、肴喰へ申し候と、いづれも楽しミ居り申し候。実ニ奥地ニ這入りシ以来、肴ニハかつへ申し候……。／と書き加えてある。覚之助たちが魚に餓えていたのは、今市に滞留していた頃からのことである。平潟は茨城と福島の県境にあって漁業もさかんな港であるが、平潟との通路がひらければ、そこから上陸してきた官軍の増援部隊との連絡がつき、今後の作戦は大いに進捗するはずである。しかし、いまはそんなことより魚にありつけることが、まず楽しみなのだ。**鶏や牛はおろか、犬、猫まで「種切れ」になるほど食い尽している状態では、これもまた当然かもしれない。**

(2) 同右。但し　といっている。↓〔ナシ〕　しかも↓〔ナシ〕
但し〔…〕述べている。↓しかし、薩、長、土の各藩兵は、すでに半年以上も転戦してをり、また大垣藩などは鳥羽伏見では幕軍として、三月以降は官軍の一員となつて苦しい戦ひをつづけてきてゐる。それが白河の攻防戦を切り抜けてホッと一息つくと同時に、ここへきて気がゆるみ、軍規が乱れてきたといふのもわからないでもない。それに、棚倉藩家中の荷物で近村の民家などへ疎開してあつたものを、兵隊がてんでに略奪することは禁じてはゐても、官軍がそれを分捕り品として接収するぶんには一向差しつかへないのである……。覚之助自身も、前の手紙の一週間後、七月三日づけの手紙で、こんなことを述べてゐる。
なるほど↓とあつて、なるほど　そういえば、↓頬笑ましいといへば、鶏や牛は〔…〕かもしれない。↓〔ナシ〕

(3) 七月三日づけ、棚倉からの覚之助の手紙には、次のやうに書いてある。／無事／此の間、御飛脚、未だ白河ニ留り候由ニつき、追啓つかまつり候。／当方は先づ格別の事は御座なく候。過日は塙と申すところエ二番隊、民心取り締りのためニ暫らく参り居り、昨日当地エ帰り申し候。此処エは二里ばかり、当所ヨリ東南ニテ水戸街道なり。／この辺、民心大いニ土州ニ帰シ、領主の如く思ヒ、いろいろ訴へ事ヲ申し出で、却つて困り入り申し候。近村の民家などエ当家中ヨリ預ケ候品物おびただしく、分取り申したる衣類、夜具等、結構の品これあり、武器ニハ余り宜しきものは得取り申さず候。薩、長、最モ巧者ニ取り申スニつき、定めテ宜しきものもこれ有るべく、夜具など実ニ結構。生れて初めて絹のふとんニテ寝申し候。衣類もたくさん、決して如何ほど寒気強き処といへども凍える気遣ひ

は御座なく候。……／棚倉落城の際、同盟軍はみづから火をかけたと、どの戦記にも書いてあるが、覚之助の手紙にはそのやうな記述はない。ただ「近村の民家などエ当家中ヨリ預ケ候品物おびただしく」とあるところをみれば、城は焼けたが衣類、夜具など、いちはやく疎開してあつた品物は、そつくり官軍の手に入つたといふわけであらう。「夜具等、結構の品これあり」、「夜具など実ニ結構」と繰り返して、「生れて初めて絹のふとんニテ寝申し候」と述べてゐるあたり、おそらくは半焼けに焼け残つた城内の一劃で、絹のふとんを引つかぶつて寝てゐる覚之助を想像すると、かへつて戦場の荒くれた気分がなまなましく漂ひ出してくるやうだ。「この辺、民心大いニ土州ニ帰シ、領主の如く思ヒ、いろいろ訴へ事ヲ申し出で」とあるのは、いかにも占領軍の将校らしく、いい気なものだといふ感じもするが、「市人も多く賊方なり。我が軍、賊中に孤立、苦心言ふべからず」（谷干城『東征私記』）といふ今市駐留の頃にくらべれば、棚倉では占領下の市民も官軍に対して最早や敵意を示してゐなかつたことはたしかだらう。これは、棚倉と今市の土地柄や人気の相違といふより、当時、市民はすでに戦争に倦きて、同盟軍であらうと官軍であらうと自分たちに迷惑の及ばぬ方へつかうといふ気持であつたにちがひない。いや、一般市民ばかりでなく、この頃になると同盟軍自体が各藩ごとに四分五裂しはじめてゐた。覚之助の手紙は、会津藩兵が意外に脆いことを述べて次のやうに言つてゐる。／これまで会藩と申セバ鬼の如く思ヒ候処、実ニ愚なるものにて、戦の仕様、（戦）略といふもの壱ツもなく、与ミし易きやうに思はれ候。当棚倉城を落し候ときも、会兵四小隊ばかり金山に出で候処、第二小隊長討たれ、暫時逃走、棚倉近く相出で候処に逆川と申す処に砲台など相構へ、此処ニテモ防ぎ止むる積りかと存ぜられ候処、ここも暫時ニ逃走。実ニ走るに巧みなるものニテ、それ故余計打ち取り候事ハ出来申さず候。当所の分捕りは未だ調べはつき申さず、大砲などおびただしく多く、大牡丹砲ニテ、なかニ四条砲五挺、内壱挺そのまま打ち申し、その他四挺は鋳たままなり。具足など余程これあり候へども、本山の搗臼、何とも相成り申さず候。城を乗取り候へバ随分自由ハ宜しきものなり。何ニテも入用のものととのひ、すでにこの状紙なども沢山にあり、右故、大筆相認め申し候。先づは右ばかり申し上げたく、匆々擱筆。／なるほど、これまでの覚之助の手紙は、巾の狭い巻き紙や、半紙一枚に細かい字でぎつしり書きこんだものばかりであつたのに、これはキラびきか何か立派な紙質の巻き紙に、大きな字でのびのびと書いてある。単に勝ちいくさに気を良くしてゐるといふだけでなく、何か戦場の生活に心身ともになじんできてゐるやうに思はれる。